

柱穴 径20cmほどの円形の柱穴を検出したが、建物等には復元できなかった。遺物もほとんど出土しておらず、詳細な時期は不明である。

第1遺構面の下層についてはC区では塗褐色粘性砂質土層に弥生時代の遺物が含まれるため順次、面を下げながら遺構の精査を行ったが、明確な遺構は確認されなかった。最終の地山面で溝状の落ち込みが検出されたが、堆積状況などから自然地形によるものと判断され、その他に遺構は確認されなかった。比較的多く遺物が出土したが、いずれも流れ込みによるものと思われる。

第3遺構面 またB区では、S X101を除去した段階で整地面が確認され(T.P.38.50m, 第2遺構面)、この面では溝が1条検出された。溝の壁は長さ30~50cmの石を2段に積んだ石垣となっており、暗渠と思われる。さらに下層の地山面では土坑2基、井戸1基が確認された(T.P.37.70~38.20m, 第3遺構面)。

いずれも、近世の遺構である。

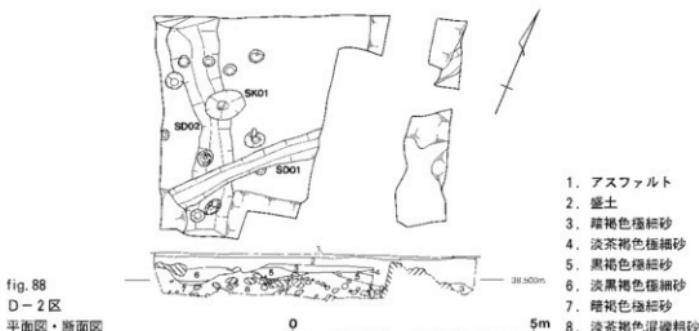
D区 東側部分において遺物包含層および遺構面を確認することができ、溝2条、土坑1基、ピット11基を検出した。

S D02は、弥生時代と考えられるが、他の遺構については、埋土の状況などから中世から近世にかけてのものと考えられる。

E・F区 E・F区については、調査区の大半が近世遺構の搅乱を受けており、一部において遺物包含層、遺構面が認められたにすぎない。遺構等は確認されなかった。

3. まとめ 今回の調査区は大半が搅乱による影響を受けており、遺構・遺物の検出はとともに僅かであった。A区の北側、及びC区の南側で弥生時代の遺構が確認されたが、遺物の出土量も少なく、弥生時代の遺構は当調査区を含め、南に向かい希薄になるものと考えられる。

また17~18世紀の段階には大きく地形の変更が行われた状況が明らかになった。近世の台状施設とそれに伴う整地層がどの様な性格によるものかは明らかではないが、いずれの面で検出された遺構も同様の方向性をもっており、屋敷地等の区画を復元する上では参考になろう。



とが 20. 都賀遺跡 第13次調査

1. はじめに

都賀遺跡は、都賀川右岸の標高40m付近の扇状地上に立地する集落遺跡である。今回の調査は震災復興に伴う個人住宅建築に先立つもので、建物部分及び道路への取り付けにより切土が必要となる部分すべてを対象として行った。



fig. 89
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

基本層序

調査区の大部分は近世～現代の建物基礎や排水溝、井戸などによる搅乱を受けており、本来の堆積を残すのは西端の一部に限られている。遺存する土層の堆積状況は、現代の盛土の下に近代、近世の整地層があり、その下は褐色砂質土、黒灰色粘性砂質土、茶褐色砂質土が順に堆積、黄褐色礫混砂質土の地山に至る。褐色砂質土から僅かに遺物が出土しているがいずれも細片である。周辺の調査によればこの層には中世までの遺物が含まれる。また東端の僅かな範囲には黒褐色粘性土が5cmにも満たない厚さではあるが遺存しており、この層から細片の弥生土器が出土している。周辺での調査データから弥生時代の包含層として捉えられる層と考えられる。

検出遺構

検出遺構は、西端の黒灰色粘性砂質土上面で検出した柱穴が3基と南東隅の地山面で検出した溝である。

柱穴はいずれも平面が円形で、径約50cm、深さ約15cmである。出土遺物はなく、柱穴の時期については不明である。

地山面で検出した溝は、東西方向の溝SD01と南へ続くSD02の2条である。

SD01

SD01は検出長2mで、今年度行われた東隣地の調査（第11次）では溝が続くであろう部分が搅乱により失われ、また西側は近世の石組遺構により搅乱を受け、さらに調査区外にのびるため全体の形状については不明である。東壁の最も遺存状況が良い部分の土層に

SD02 よれば、溝の規模は幅50cm、深さは10cmである。SD02はさらに不明確で、SD01から南へのびる交点部分と考えられる箇所が僅かに検出したに留まり、ここにも現代の搅乱が及んでいる。南壁の土層観察からやや幅広になったSD01の埋土の一部にあたる可能性もある。2つの溝が交わる部分からは弥生時代中期の土器がまとまって出土しているが、いずれも細片である。

SD01は今年度、今回の調査区の北側20mの地点で行われた調査（第10次）で検出された方形周溝墓を形成する東西溝にはほぼ平行しており、同じ方向性をもつものといえる。先の調査では溝のコーナー部分などから弥生時代中期の供獻土器や立石を含む人為的に配されたと考えられる石のならびが確認されているが、今回の検出範囲内では供獻された状態の土器は出土しておらず、またマウンドの状況などは全く不明である。積極的に周溝墓に伴う溝と位置付けるには問題があるが、溝の規模や方向性といった類似点は少なからず挙げられ、ここではSD02の在り方を含め、溝を共有する複数の周溝墓が南に存在する可能性があるとして留めておきたい。

3. まとめ 今回の調査区では遺構面の大部分が近世以降の搅乱により失われており、遺存状況は決して良好な状態ではなかったが、柱穴と溝が検出された。地山面の溝は検出できた範囲が限られているが、方形周溝墓を形成する溝であるとした場合、墓域が南へも広がる可能性を示唆するものといえ、当遺跡における弥生時代中期の墓域を復元する上では重要な成果である。今のところこの方形周溝墓群を形成したと考えられる母体となる集落の存在は不明であり、遺跡の様相を知るにはなお、調査データの蓄積が必要であろう。

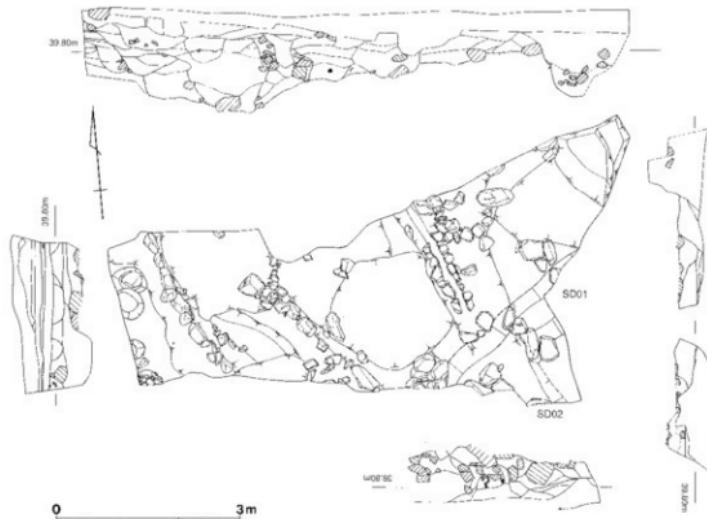


fig. 90 調査区平面図

21 八幡遺跡 第6次調査

1 はじめに

八幡町は、六甲六ヶ村（高羽・八幡・篠原・都賀・徳井・走出）のひとつである。

八幡遺跡は、石屋川と都賀川に挟まれて南に延びる高まりの中央にあって比較的安定した立地を占めている。

隣接する第1次調査地においては、中世の掘立柱建物等が出土している。

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、埋蔵文化財に影響の及ぶ基礎部分について調査を実施した。

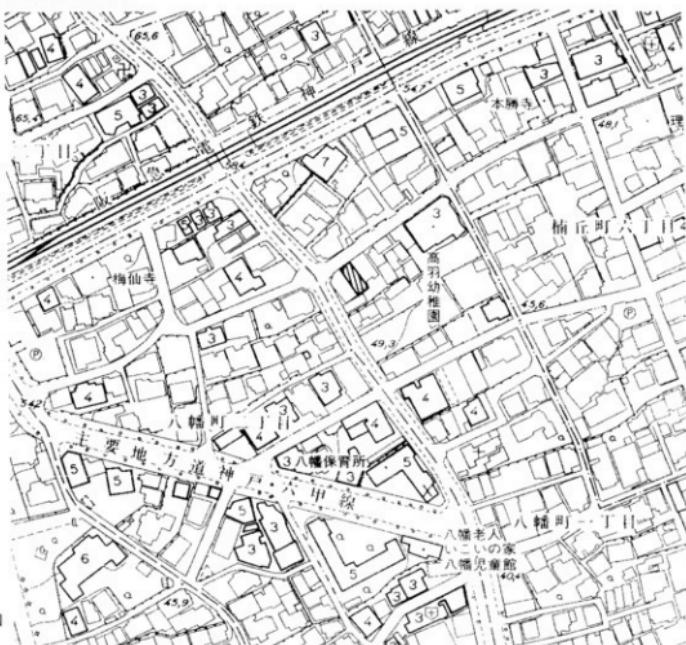


fig. 91
調査地位置図
1 : 2,500

2 調査の概要

基本顺序

調査区の基本層序は、地表下50cmまでの盛土下に焼土層、灰黒色シルト層が堆積し、中世の遺構面となる。

調査区南端において検出した幅2.26m、深さ68cmを測る、東西方向の溝である。この溝の南側は、第1次調査において検出された溝と同様に急激に落ち込んでおり、区画の溝と考えられる。なお、この溝は、第1次調査のSD01に続いているものとみられる。出土遺物から13世紀後半には、埋没していたと思われる。

この溝は南側が極端に段落ち状に低くなることから、溝の形状ともあわせて坪境溝である可能性がある。

3. ま と め 今回の調査では、遺構としてSD01が検出されたが、第1次調査の結果同様に北側の道路からやや離れた部分においては遺構が希薄になる傾向がみられる。調査区の南側は、水田もしくは畠として利用されていたようである。

今回出土した遺物は、13世紀の時期を示すものが多く含まれている。

一般的に中世、特に13世紀以降においては、密集形の集落が多く形成される時期にある。中世における八幡町がこれにあたるかどうか判断はできないものの、今回の調査地付近が集落における縁辺に位置する可能性は高いものと思われる。

また、中世において神社や寺院といった施設は防御上、集落の角に築かれる場合が多い。このことを八幡町周辺においてみて考えると、梅仙寺と八幡神社を結んだ線上が想定される。地形的にも阪急電鉄の線路から北は急に傾斜もきつくなってしまっており、おそらく集落の北限を示すと考えられる。

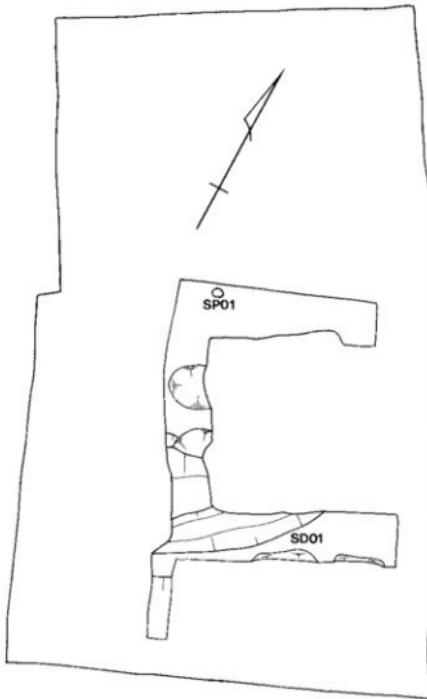


fig. 92
調査区平面図

0 5m

しのはら 22. 篠原遺跡 第17次調査

1. はじめに

篠原遺跡は、六甲山南麓を流れる六甲川と袖谷川が合流して、都賀川となる地点の北方および東方に広がり、六甲川両岸の標高50~85mの扇状地に立地する。

昭和58年に第1次調査が行われて以来、これまでの16次にわたる調査で、おもに縄文時代と弥生時代の遺構・遺物が確認されている。

今回の調査は、第2次・第6次調査地点に南接しており、標高約55mの北東から南西へ傾斜する扇状地上に立地する。試掘調査と隣接地での発掘調査結果をもとに、縄文時代から弥生時代にかけての遺構・遺物の広がりが想定された。



小皿 2 点が、土壤底より約10cm浮いた状態で出土した。ほかに金属器などは出土していない。また、遺物包含層掘削時に、付近から土師器小皿がもう 1 点出土している。

遺物の出土状況などから、頭位は北側と考えられる。

時期は出土遺物より、鎌倉時代と思われる。

第2遺構面 黒色砂質土掘削後、褐色砂上面で検出した遺構面である。堅穴住居・土坑・溝・ピットを検出した。

S B02 南西部で検出した、方形堅穴住居の北東部分である。一辺 6 m の方形堅穴住居である。

北片には幅約 1 m 、高さ約 15 cm のベッド状遺構が付設され、さらに北東隅部分に長さ約 80 cm 、幅約 50 cm 、高さ約 13 cm の段が付属する。西南端でも、南側にのびる高さ約 10 cm のベッド状遺構を検出しており、これから類推して、堅穴住居の規模は一辺約 4.8 m 程度と思われる。

主柱穴は 4 本と推定され、ベッド状遺構のコーナー部分で検出した。

北壁中央部分で、壁面とベッド状遺構上面に沿うように炭化材を検出した。また、ベッド状遺構の内側で比較的多く炭を検出した。

遺物は、弥生時代後期の土器が出土している。

S B03 中央北側で検出した、方形の堅穴住居である。規模は、東西約 6 m 、南北約 5.5 m 、深さは最大で 45 cm を測る。四辺ともにベッド状遺構を付設する。北東コーナー部分は S B04 に切られているため、不明確である。

中央土坑は直径約 50 cm 、深さ約 10 cm であるが、周囲は焼けたような状況ではなかった。

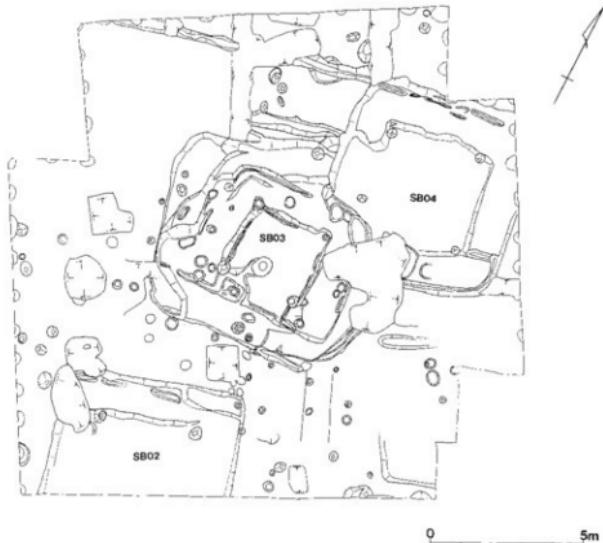


fig. 95
第2遺構面平面図

遺物は、埋土上層・中層・下層から弥生時代後期の土器が出土した。中層からは炭が出土している。また、西南隅から磁石が出土した。

北西側に、もう一つ方形堅穴住居のコーナー部分と思われる遺構を検出した。S B03に先行する堅穴住居と思われる。

S B04 北東隅で検出した堅穴住居で、一辺約6m、深さは約35cmの方形堅穴住居である。南西側は搅乱のため不明だが、西辺での観察によればS B04はS B03を切っていることがわかり、S B03より一段階新しい堅穴住居であることが理解される。

南辺部分では、深さ約8cmを測る周壁溝を伴う。北辺部分でも、途切れながら周壁溝が存在する。ベッド状遺構は、西側南半以外に存在する。

また主柱穴は3本確認した。いずれもベッド状遺構のコーナー部分に位置する。南西部の主柱穴については確認できていない。また、中央土坑も確認できなかった。

遺物は、弥生時代後期の土器のほかに鉄製品が3点出土した。1点は埋土上層から、1点は北辺ベッド状遺構の肩から、もう1点は東辺ベッド状遺構の上からの出土である。

その他、黒色砂質土を埋土とするピットを何ヶ所かで検出した。

第3遺構面 黄褐色砂上面で検出した、縄文時代晩期の遺構面である。土坑やピット、土器棺が検出された。

土器棺1 北西部で検出した。南半は搅乱のため掘形の規模は不明である。縄文時代晩期の深鉢を正立させて設置している。

土器棺2 東部南端で検出した平面形卵形の土坑で、長径76cm、短径58cm、深さ28cmである。縄文

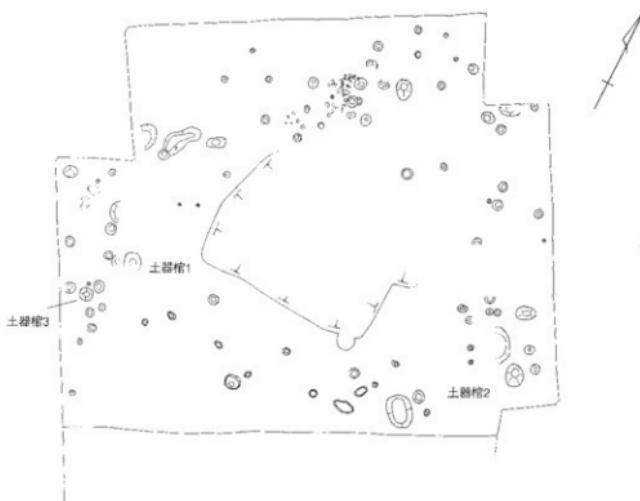


fig. 96
第3遺構面平面図



fig. 97 土器棺 1



fig. 98 土器棺 2

時代晚期の土器が、横倒しに破損した状態で出土した。埋土中層の土器片の間より、骨小片が出土した。土器棺であった可能性が高い。

土器棺 3 西部中央で検出した。南北47cm、東西50cm、深さ32cmの掘形で、褐色砂を埋土とする。

縄文時代晚期の深鉢を正立させて設置している。

深鉢の口縁部は土圧により割れているが、体部はひびのみで、完形の深鉢である。底部も欠損していない。器高約28cm、口径約34cmである。

3. まとめ 今回の調査では、縄文時代晚期の遺構や、弥生時代後期の竪穴住居をはじめとする遺構を検出でき、土器やサヌカイト片など多くの遺物が出土した。

縄文時代晚期の土器棺の検出は、第2次・第6次調査とあわせて、墓域の広がりを再検討する上で重要な資料となる。

弥生時代後期の竪穴住居は、4棟以上を検出した。特に、褐色砂上面で検出したSB02・SB03は残存状況が良好である。住居址の新旧は切り合い関係からSB01→SB03→SB04となる。

また第2遺構面は、現地形とは逆に東南側へわずかに傾斜しており、当該期の地形と住居の立地の関係がうかがえる。

遺物としては、弥生時代後期の遺物が多く出土し、縄文時代晚期のものがそれに続く。中世の遺物は少量であった。



fig. 99 土器棺 3

23. 篠原遺跡 第18次調査

1. はじめに

篠原遺跡は六甲山南麓を流れる六甲川、榎谷川が合流する標高50~85mの扇状地上に拡がる遺跡であり、現在までに縄文時代中~晚期、弥生時代後期、中近世の集落の存在が確認されている。



fig. 100
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

基本層序

基本層序は、現代の盛土及び耕作土の下に中世の遺物包含層である暗褐色シルト混じり細砂をへて、中世の遺構面である、灰色細砂（第1遺構面）がみられ、更に弥生時代後期の遺物包含層である、黒褐色疊混じり細砂、灰色細砂、黒色細砂を挟んで、弥生時代後期の遺構面である、黒色細砂質シルト（第2遺構面）となる。

第1遺構面

第1遺構面では中世の遺物を含む、深さ約60cmの土石流を確認したが、遺構は存在しなかった。

第2遺構面

第2遺構面で検出された遺構は弥生時代後期の溝1条（幅80cm、深さ25cm）のみである。

遺物

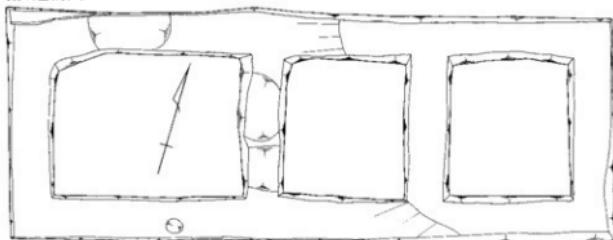
今回の調査では、縄文時代、弥生時代、中世の遺物が28ℓ入りのコンテナで2箱出土した。内容は、縄文時代晩期中葉の土器、弥生時代後期の土器の他、中世の土師器・須恵器等が出土しているが、量的には弥生後期の土器が殆どを占める。

3. まとめ

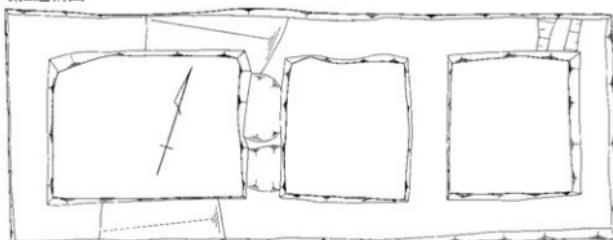
今回は、東西を浅い谷に挟まれた、集落の東辺に当たると思われる地点を調査した。結果、遺物及び遺物包含層は確認されたものの、遺構は殆ど検出されなかった。西側に隣接する、平成7年度に調査を実施した地点においては、弥生時代後期～古墳時代初頭の住居

址等の遺構が確認されている為、今回の調査部分は、集落の東端部付近であると考えられる。これは今後、篠原遺跡の拡がりを検討する上で重要な成果であった。また、縄文時代の遺構面に関しては、今回の調査では工事影響深度以下であったために未調査であり、遺構の存在は不明である。

第1遺構面



第2遺構面



W

E

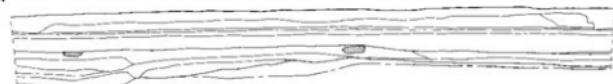


fig. 101
調査区平面図
・断面図

0 5m

しのはら 24. 篠原遺跡 第19次調査

1. はじめに

篠原遺跡は、昭和4年に小林行雄氏によって紹介され、以来神戸市でも数少ない縄文時代中期から晚期にかけての遺跡として知られてきた。近年開発に伴う発掘調査が多く行われ、現在も遺跡の残されている部分が多いことが改めて確認してきた。最近の調査結果では、標高50~80mの丘陵扇状地の広い範囲に立地する縄文時代から平安時代までの複合遺跡であることがわかっている。

fig. 102
調査地位位置図
1 : 2,500



2. 調査の概要

基本層序

調査区の基本層序は、盛土下に近・現代の耕土の下に弥生時代V期の遺物を含む暗茶褐色土が堆積しその下の明黄褐色砂質土が遺構面となる。

検出遺構

確認された遺構は、ピットが63基、土坑1基、溝1条である。

遺構面は南へ向かって緩やかに傾斜するが大きな落差はない。調査区南東端部分は、整地によって削られており、当初の面は残されていなかった。

SK01

長径1.0m、短径0.8mほどの楕円形に、一段深い窪みが付随したような不整形の平面形で、深さは、50cm程度である。弥生土器の細片が出土している。

SD01

幅約25cm、深さ約20cm、長さは検出した範囲で約80cmだが調査範囲外に続いており、全体の規模などは不明である。やや湾曲した形状で床面にピットを1基有する。

ピット

全部で63基確認できたが、大きさ、平面形、深さ、配置などに規則性はなく、相互関係は不明である。ピットのいくつかから弥生土器の細片が出土している。

下層

なお、遺構面の下層についてもグリッド調査を実施したが、人頭大の花崗岩塊が多く混じる堆積となり、縄文時代の遺構、遺物等は確認されなかった。

3. まとめ 今回の調査地は、周辺の調査成果から開始当初、明確な遺構・遺物の出土が予想されたが遺物の出土量は比較的少なく、遺構も小規模な性格不明のものである。居住空間の要素が薄い地区と考えられるが、包含層の堆積状況も南側ほど疊の混入が多く、大きいものでは成人男性の拳大以上のものが密集して堆積している様子から、あるいは斜面の上側から押し流されるようにして堆積し、本来の包含層は流失して置換してしまっている可能性も考えられる。

含まれる遺物は細片が多く、時期の判別できるものは少ないが、判別可能なものに関しては、いずれも弥生時代V期のものである。包含層中から出土した遺物で特筆すべきは磨製石剣の破片である。石剣は、無柄のいわゆる鉄劍形のものの中央部分で、茎および先端は失われているために正確な大きさなどは不明である。残存部分の長さは約7cm、幅約3.5cm、厚さ0.8cm程度のものである。

遺構から出土した遺物はいずれも細片のため正確な時期は不明だが、状況から弥生時代V期のものと考えて差し支えないと思われる。



にの みや 25. 二宮遺跡 第1次調査

1. はじめに

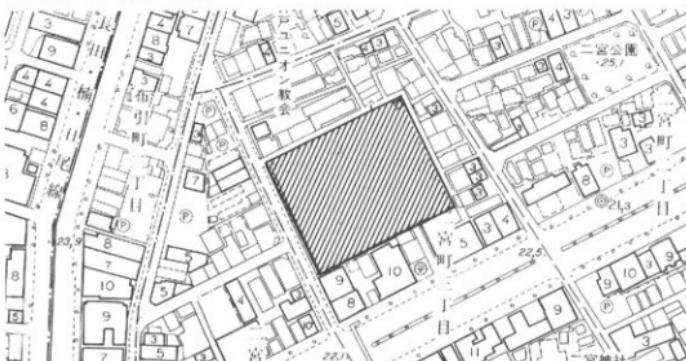
神戸市中央区二宮町周辺は、これまで遺跡の分布が明確でなかった場所である。今回、旧二宮小学校跡地に共同住宅の建設が計画され、この工事に先立つ試掘調査によって新たに遺跡の存在が確認され、二宮遺跡と命名された。

六甲山系の南麓には、中小の河川によって運ばれた土砂が堆積してきた扇状地が広がっている。そのなかでも、洪水による土砂の運搬作用によって、形成される自然堤防上に集落遺跡は形成されている。

二宮遺跡の東を流れる現在の生田川は、慶応3年（1867）の兵庫開港に伴い河口付近に建設された、外国人居留地と波止場を洪水から守るために、明治4年（1871）に現在の位置に付け換えられた人工河川である。それまでは、JR新神戸駅から西に流れ、二宮遺跡の西側を通り、JR三ノ宮駅の前を抜けて、神戸市役所前のフローラードを流れている。

二宮遺跡は、この旧生田川東岸の自然堤防上に営まれた集落遺跡であることが現地形および地形図から判断できる。

fig. 104
調査位置図
1 : 2,500



2. 調査の概要

A 区

A区は、鉄筋校舎の基礎部分で、深く抉られており、奈良～近世の遺構面は、遺存状態が極めて悪かった。飛鳥時代の遺構面は、北半部は建物基礎による搅乱を受けていたが、南半部は遺存状態は良好であった。

飛鳥時代

飛鳥時代の遺構面は、北から南に緩やかに傾斜していくが、西端部分は、旧生田川の氾濫でえぐられて、消失している。この洪水によってもたらされた砂は、北西端の厚い部分で約1mあり、南東へゆくほど薄くなる。A区の飛鳥時代の生活面であり、遺物包含層の黒褐色砂質土はこの砂に覆われている。また、A～C区を貫いて北東～南西に流れる流路状の窪地がA区の中央部を走っている。ほとんどの遺構はこの窪地を境にして、北側と南側に分布する。竪穴住居2棟、掘立柱建物2棟、鍛冶遺構が数ヶ所発見された。

A区 S B301

A区S B301は、一辺3.5mの方形の竪穴住居で、北西部分は流路状の窪地の堆積土を掘り込んで造られている。

床面の西、南、東壁には、高さ約10cm程度のベッド状の高まりがある。また、西側のベッド状の段の上で、カマドが検出されたが、煙出し部分は残っていない。カマド付近から、7世紀初頭の須恵器壺が発見されている。

A区S B302 一辺の約5mの方形または長方形の堅穴住居である。住居址東辺のカマド付近が僅かに残るのみでその他の部分は、ほとんど残っていない。カマドは残存状態が良く、煙出し部は約1.2mの長さがある。カマド付近から、7世紀初頭の須恵器壺が出土した。

A区S B303 A区中央部で発見された。S B301と同様に、流路状の窪地内で検出された。この窪地がある程度埋没した段階で造られたと推定されるが、明確でない。

建物規模は南北方向2間×東西方向3間(3.4m×4.0m)で、総柱の掘立柱建物と推定される。この建物は、東西方向の柱掘形が細長いものが2ヶ所あり、2本の柱を埋め込んで立てるようしているのが特徴である。

A区S B304 A区南端部で検出した掘立柱建物で、4間×3間以上(6.6m×4.8m)の大きさがある。この建物は、南側に庇を持つ。また、総柱でない構造からみて、床を設けない土間の建物であったと推定される。

鍛冶炉 赤く焼けた土や炭が多く入った浅い土坑が南端部で4～5カ所発見された。付近の堆積土は黒褐色に変色し、炭と焼土が混入していた。この状況から鍛冶炉と判断されたが、各土坑の中は、堅く焼け締まった部分が認められないため、炉の本体は消失しており、炉の下部構造と炉壁や炭が発見されたものと考えられる。後述のB区の鍛冶炉のように、屋根を葺いたり、溝を巡らせた痕跡が認められることから、屋外の鍛冶炉の可能性が高い。炉址の周辺からは、鎌の刃、刀子、釘、U字型鋤先等の鉄製品が出土した。

奈良時代 A区S X201 飛鳥時代の遺構を埋める洪积砂中から、浅い土坑が数基と炭の詰まった土坑を1基検出した。その中の1基から、土師器壺が掘えられた状態で発見された。これを取り上げた後、壺の中の砂を篩で選別したが、遺物は発見されなかった。この壺は、まじないのための器、または胞衣壺と考えられる。

平安時代 ~鎌倉時代 A区S B101 南端部では、平安～鎌倉時代の土器を含む耕作土層を除去した段階で、2×2間(3.8m×3.8m)の掘立柱建物が1棟確認された。総柱でない構造から、土間の建物であったと推定される。建物の時期は、おおむね平安～鎌倉時代の中に納まると考えられる。



fig. 105 A区S B301・303

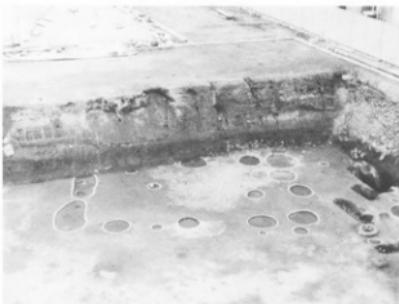


fig. 106 A区S B304

B 区

B区は、北東から南西方向に緩やかに傾斜する地形である。飛鳥時代の遺構面は、東端部では、当時の生活面であった黒褐色砂質土が中世の耕作によって削平されている。

また、A区の黒褐色砂質土上を厚く覆っていた旧生田川の氾濫によってもたらされた洪水砂は、B区の北端部、西端部、中央部まで堆積しているが、中央部南端付近は、若干高く、洪水砂は堆積していない。

また、A～C区を貫いて北東～南西に流れる流路状の窪地は、調査区の北端部～西端部を走っている。遺構はこの窪地を境にして、一部の例外を除き北側と南側に分布する。北側には、小さなピットが群在する。南側には、堅穴住居・掘立柱建物・鍛冶炉が窪地に沿って建っていることが判る。

飛鳥時代

B区では、掘立柱建物6棟、堅穴住居3棟、鍛冶炉が2カ所、溝や柵列が発見された。

また、飛鳥時代をややさかのぼる古墳時代後期の滑石製鉢鍤車が、当時の地面を覆う洪水砂中から出土した。

B区 S B301

2.8×4.6mの長方形の堅穴住居で、西側の辺にカマドがあるが、煙出しの部分は削られている。西と南の床面に壁を伝て入ってくる雨水を処理する周壁溝が掘られている。床面と覆土内の出土遺物から7世紀初めの住居址と判断される。

B区 S B302

5×4mの長方形の堅穴住居で、北側の辺にカマドがあるが、砂混じりの土で築いているために、崩れて原形を止めていない。

覆土内からは、焼土、炭がまとまって出土した。後述の鍛冶炉で発生した廃棄物を住居廃絶後に投棄したものと判断される。床面からは7世紀初めの須恵器壊が出土した。

B区 S B303

中央部南端で発見された5×2m以上の方形または長方形の堅穴住居である。北側の辺にかまどがあるが、崩れて原形は止めていない。

柱穴が2基確認されており、検出状況からみて、4本柱の構造と考えられる。東側の床面に周壁溝が掘られている。S B303は時期を決める出土遺物が少ないが、7世紀初めごろの堅穴住居と考えられる。



fig. 107
B区飛鳥時代
遺構面全景

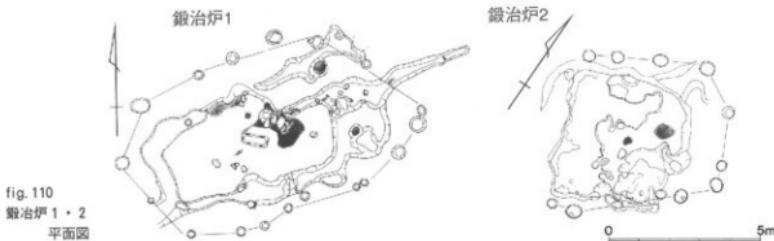
- B区SB304** B区東端部で発見された掘立柱建物で、東西方向2間×南北方向3間以上（3.4m×2.4m）の大きさがある。この建物は、柱掘形が細長く掘ってあり、2本の柱を埋め込んで立てるようにしている。同様の構造の建物はA区SB303がある。ただし、総柱建物ではないようである。なお、この建物だけが後述の柵列SA301の東側に位置している。
- B区SB305** 2間×2間（3.0m×3.6m）の総柱建物である。平面規模からみて、床のある倉庫的な機能を持つ建物であった可能性が高い。
- B区SB306** 2間×2間（4.0m×3.0m）の総柱建物で、内側にある柱は柱通りが半間分ずれている。この建物は、後述のSB310の柱穴を壊して柱を埋め込んでいる。
- B区SB307** 2間×2間（2.8m×3.0m）の総柱建物で、柱の配置からみてSB305、306、311と同様の有床の倉庫様の建物であった可能性がある。
- B区SB308** 2間×2間（3.0m×4.4m）の掘立柱建物で、後述の鍛冶炉1の床面の土を除去した後に確認された。建物の内側に柱がないため、土間の建物が想定できる。
- B区SB309** 後述の鍛冶炉2の作業床面の粘質土を除去したところ、粘質土を貼った範囲とほぼ同じ規模で、2間×2間（3.0m×3.0m）の総柱の掘立柱建物を検出した。この建物は、柱穴に重複が認められることから、ほぼ同規模で2回建て替えられたことを示している。なお、北西隅の柱掘形から、7世紀初めの須恵器坏が完形で出土している。
- B区SB310** 中央部北端にあり、3間×1間以上（5.0m×2.4m）の掘立柱建物である。この建物は、SB306の柱掘形に柱穴の一つを切られている。
- B区SB311** B区西端部とA区中央部にまたがる位置にあり、2間×3間（5.2m×3.6m）の掘立柱建物である。この建物址の約1/3は調査区外に延びている。現況を見るかぎり、建物内側には柱ではなく、土間構造の建物であったと推定される。
- 掘立柱建物の時期は、出土遺物が細片が多く、また出土遺物の充分な検討を経ていないため、明確ではないが、概ね7世紀代に納まるものと考えられる。
- 鍛冶炉** いずれの鍛冶炉も、鍛冶炉自体は壊れているため、構造ははっきりとしないが、砂地の地面の上に粘土を貼って炉の底面とするか、あるいは地面をわずかに掘りくぼめて炉としているようである。また、金床の台石あるいは、炉の基底部と思われる石囲いの一部が残



fig. 108 B区SB309



fig. 109 B区SX201



されているところがある。

鍛冶炉 1

鍛冶炉 1 では、溝がほぼ前周する内側に炉が設けられており、その周りから柱を立てた穴が発見された。雨水などの湿気が炉にあたらないように溝を周間に掘り、柱を立てて屋根を葺いた建物があったと想定される。溝は、7 mほど東から掘られ、鍛冶炉 1 の周囲を回り、約20 m東へ流れ途切れる。溝で囲まれた範囲は、不整な長方形で、約5.4×2.0 mの範囲である。鍛冶炉の周囲に溝が巡り、柱を立てて屋根を葺いた建物がある例は大阪府柏原市大塚遺跡で発見されている。

鍛冶炉 2

鍛冶炉 2 では、3.6×4 mほどの範囲の地面に粘質土を貼り、作業面を造っている。この面には、炉の痕跡と思われる焼土や炭が入りこんでいた。また、その周りには、東側が開口する柱穴が取りまくことが判明した。これらから、鍛冶炉と作業面は、開口部が東側の建物を上屋としていたと想定される。

今回の調査で出土した鉄製品は、A、B区合わせて鋤先、鎌、刀子、釘、やりがんな、等の農工具や武器である鉄鎌、製作工程で発生する鉄片が現在のところ確認されている。また、鉄滓や磁石、礫の羽口が出土した。

B区 S D301

B区中央部～西端部にかけて延びる溝で、鍛冶炉 1 を取りまいて東から西に流れている。長さ約27 m、幅約60～1 m、深さ約10～20 cmを測る。鍛冶炉 1 の西側で、溝の堆積土内から金銅製の金箔貼りの耳輪 1 点が出土した。

柵 列

鍛冶炉や住居址、建物址が集中する部分の東には、遺構のまばらな空白地をはさんで、円弧をえぐく一重の柵列が並び、その中に S B304 が建てられている。また、柵列より東側では、土坑が 2 基発見されたが、出土遺物は少なかった。

西側の鍛冶炉や住居址などと柵で区切る意味は明らかでないが、柵の西側に居住する鍛冶工人を統括する側の人物・集団がそこに存在した可能性がある。

また、A、B区では、棒状有孔土錠とよばれる魚網の錠りが、多数出土している。生業の一部として、漁労が行われたことが窺われる。

奈良時代

B区の北西部を流れる流路状の窪地は、飛鳥時代の洪水によって一旦は埋没するが、奈良時代にその一部が再び流路状の窪地となったことが出土土器から判明した。その上を更に洪水砂が覆うが、その砂を少し掘りこんで、土師器壺が 5 枚と須恵器壺蓋が 2 枚收められていた。埋納された理由は、明らかでないが、洪水を繰り返す旧生田川の神を鎮めるまじないの跡という考え方ができる。また、洪水砂中には、完形の土師器壺が出土する地点があり、しばしば祭祀が行われたことを示唆している。

流路状の窪地 A～C区を貫いて北東～南西に流れる流路状の窪地は、上記の洪水砂が堆積した段階で完全に埋没し、B区の中央部付近を北から南に流れるように方向を変え、B区南端でさらに西に流れの方向を変えるようである。

B区中央部の窪地内では、奈良時代の土器が大量に投棄されているのが発見された。また、土器と共に土馬がばらばらに割られた状態で出土した。C区の窪地内でも、同様の破片が出土し、これらの破片は1個体に接合できた。

平安～鎌倉時代 上記の窪地の埋没土（茶褐色砂質土）上には、耕作土と思われる平安～鎌倉時代の土器を含む暗灰色砂質土が堆積し、その土から掘りこまれた状態で遺構が確認された。

B区SB101 B区中央部では、東西方向7間×南北方向4間（16.0m×8.4m）の掘立柱建物が1棟検出された。5×2間の母屋部分に、各1間ずつ張り出した庇を持つ入母屋造の上部構造が想定される建物である。平安～鎌倉時代の土器を含む層から掘りこまれていることから、おおむね当該時期と判断される。A区でも同時代の建物址が発見されているが、建物の主軸方向が異なっている。

C区 C区は、北東から南西方向に緩やかに傾斜する地形である。校舎基礎によって、調査面積の約1/3程度が攪乱され、遺構面は全く残っていない。

**飛鳥時代
護岸遺構** 飛鳥時代のA～C区を貫いて北東～南西にはしる流路状の窪地は、C区では、窪地の斜面に拳大の石を貼った部分が一部認められた。また、貼石が顯著でない斜面部分には、多くのピットが不規則に検出された。ピットの中には杭状の木材を斜めに埋め込んだものが認められた。以上からこれらのピットは、護岸のしがらみであった可能性が強い。ただし、このしがらみと考えられるピット内からは、土器がほとんど出土していないため、時期の確定がむずかしく、後述の石の堤状遺構と共に、奈良時代の所産である可能性も残されている。

飛鳥時代には北東から南西方向に走っていた流路が、洪水で土砂が大量にたまつた後は、流れの向きを南に変え、前述のB区中央部の窪地に接続する。



fig. 111
C区全景

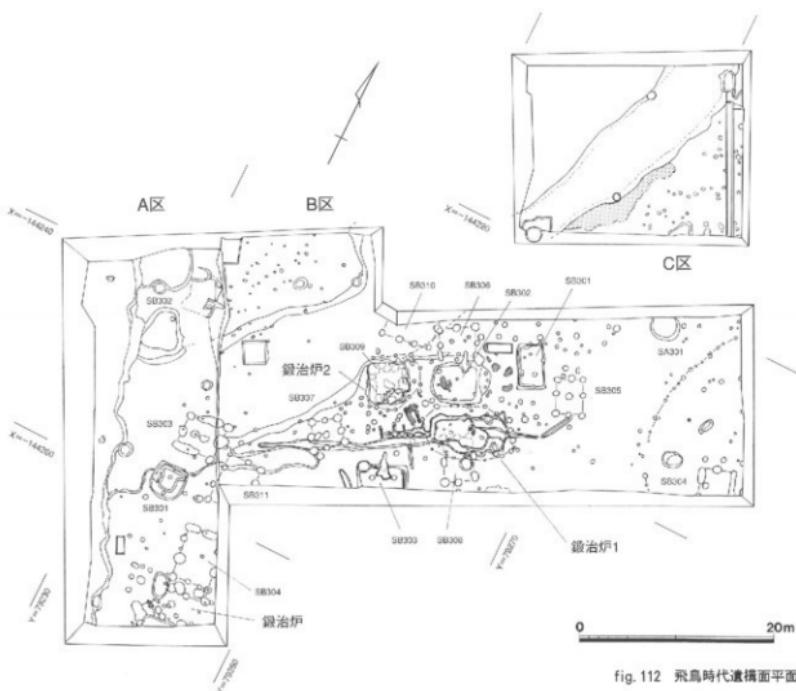
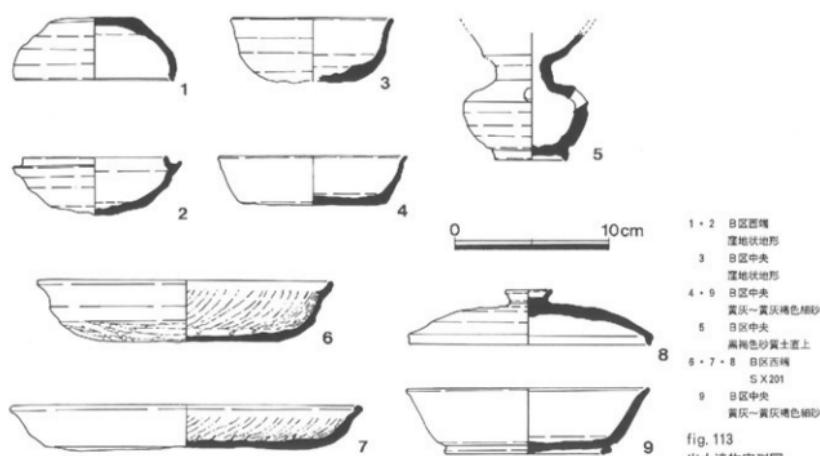


fig. 112 飛鳥時代遺構平面図



石積の堤状遺構 この窪地がある程度埋まった段階で、その流れに直交して拳大～人頭大の石を積んで堤状のものを造っている。これは、現存長は、約18m残り、幅約3m、現存の厚さ20～30cmほどである。用途については、今後検討すべき課題である。

平安～鎌倉時代 旧耕作土を除去した段階で、遺構検出を試みたが、ピットが数基確認されただけで、当該区は耕作地であったことが判る。また、前代から存在した流路状の窪地は、幅を狭め、改修されながらも江戸～明治時代頃まで用水路として残っていたようである。

3. まとめ 今回の調査でわかったことは、以下の通りである。

弥生時代 飛鳥時代以下の堆積層を断ち割り調査を行ったところ、今回の調査地内では、旧生田川～古墳時代中頃の氾濫で、巨礫とともに弥生時代～古墳時代中頃の土器が流されてきて堆積しており、この当時は洪水の影響を受けやすい不安定な土地であったことが窺える。

飛鳥時代 古墳時代後半までに、土石流の堆積でできた自然堤防上に村が成立する。今回の調査では、A～C区で竪穴住居5棟、掘立柱建物10棟、鍛冶炉が発見された。

この遺跡で発見された鍛冶炉は、湿気よけに溝を周囲に掘り、柱を立てて屋根を葺いた鍛冶炉専用の建物があるという、この当時としては珍しい構造をもっている。このことから、当遺跡では、竪穴住居や掘立柱建物などの住居内で行うような、片手間に小規模な鍛冶作業を行っていたとは考えにくく、むしろ鍛冶を専業とする集団の存在が想定される。

また、農工具だけでなく、鉄鎌という武器の製作を行っていたということは、それらを必要とする地方豪族の下で鉄製品を製作していた様子が窺われる。

また、鍛冶炉周辺で発見された竪穴住居や掘立柱建物は、生産に従事した工人とその家族の住居や倉庫などの可能性がある。

他の遺跡の調査例では、鍛冶炉は、鉄滓、炭等の廃棄物の処理と防火対策から居住条件が劣る集落縁辺部に立地することが多いという。今回の調査でも、旧生田川の氾濫による洪水にしばしば襲われるような地を占めていることが、明らかになった。

奈良時代 飛鳥～奈良時代の洪水によって運ばれてきた砂に覆われた上には、住居は再建されず、まじないで供えられた土器や土馬が出土した。

また、窪地に土器を大量に捨てているのが発見されたり、石を積み上げて堤状のものを造っている。なお、この時期の村の中心は、調査地の東側と推定される。

平安～鎌倉・室町時代 調査地付近は、基本的に耕作地として利用されているが、掘立柱建物2棟が発見されていることから、時代によっては、部分的に屋敷地として利用されている。

江戸時代 前代に引き続き、耕作地として利用されている。A、B区の一部はこの洪水砂によって埋没しているため、歴史的状況がよく判る部分がある。洪水の時期は、耕作土内の遺物から、江戸時代後半頃と判断される。

『日本書紀』の神功皇后の条に、生田神社の祭神が「活田長嶽國」に鎮座したいというお告げをしたという記述がある。この時に祭られた場所が新神戸駅の北側にある布引丸山（砂山）であるという言い伝えが地元に残されている。

「活田長嶽國」の実態は不明であるが、この小山から俯瞰できる、旧生田川両岸の自然堤防上に沿って営まれた村むらのことを示しているという想定もあながち不可能ではない。

ひょうごつ 26. 兵庫津遺跡 第15次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、古くは「大輪田泊」と呼ばれ、文献上もたびたび登場する。特に平清盛により経ヶ島が築造され、日宋貿易の拠点とされたことは著名である。

中世後期に入ると寺社勢力の庇護のもとに瀬戸内海運の主要港として栄えた。このことは、「兵庫北閑入船納帳」などの文書からも窺うことができる。また、室町時代前期には、明との通商の窓口として将軍家の倉庫が設けられるなどの整備が行われた。明船来訪に伴う、將軍足利義満の兵庫下向の記事も文献にたびたび登場する。

その後、15世紀半ばに始まる応仁・文明の乱により港としての機能は荒廃する。しかし江戸時代になると大阪と西国との人の往来、物資の流通の増加に伴って発展を続け、人口2万余をかぞえる国内でも有数の港町として栄え、やがて幕末の兵庫（神戸）開港をむかえる。遺跡の東方に隣接する波止場、旧居留地など歴史的景観は、今なお港湾都市神戸のシンボルとなっている。



fig. 114
調査地位位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

基本層序

調査区の層序は、表土、盛土下に部分的に灰白色砂が堆積し赤褐色の焼土層に至る。一部の遺構は、この灰白色砂をベースとしており、この深度は概ね G.L. -80cm を測る。

第1遺構面以下の層序は、盛土（砂）と思われる灰白～黄灰色の砂層を20cm前後はさみながら焼土層、焼土面となったやや粘質の基盤層という堆積が3～4次繰り返され第7遺構面のベース土である暗灰褐色シルト層をへて、T.P. 0 m 前後で砂堆である黄褐色砂へ至る。黄褐色砂には、調査区の東部を中心に遺構がみられるが、これより以下の堆積には、遺構、遺物は確認されなかった。

第1遺構面

赤褐色焼土および、さらに1層上の灰白色砂をベースとする遺構面で、江戸時代後期から幕末にかけての時期と思われる。主な遺構としては、建物、胞衣壺埋納遺構、井戸、炉跡、埋箱、水琴窟などがある。



fig. 115
第1遺構面全景



fig. 116
第2遺構面全景

焼土層 厚10~30cmほどの焼けた壁土、瓦片などを多量に含む焼土層である。調査区外すべての方向にも広がっている。出土遺物などから文献に記されている宝永5年(1708)の大火灾に伴う焼土層であると考えられる。

第2遺構面 調査区のはば全面をおおう焼土層下において確認された遺構面で焼失した町屋群が検出された。上面には、焼け落ちた炭化物の堆積がみられる。

町屋群 調査地の北側をはしる街路に取りつくかたちで、町屋と考えられる建物群を7~8棟検出した。間口4~6m、奥行き14m前後を測る。

礎石建ちの建物で、壁を接するように並んでいる。いずれの建物も片側に1m前後の版築された断面形が浦鉢状の土間をもつ。

S X04 長軸2.3m、短軸1.0mの楕円形の土坑である。焼けた瓦、壁土等が多量に投棄されていた。下層において埋め桶遺構が検出された。火災後、2つの遺構をつないで切り広げて瓦礫を投棄するために転用されたと考えられる。

埋め桶遺構 前述のS X04の下層において検出された埋め桶遺構である。底板の直径1.0m、残高90cmの木桶が据えられている。底20cmほどは火を受けた跡がみられず、陶磁器、魚骨等の堆積がみられた。芥溜めなどゴミの集積遺構と考えられる。

石組み遺構 調査区の南西部に位置する長方形の石組み遺構である。内法は東西0.8m、南北1.5mで深さ1.0mを測る。20~40cmの一部平らに加工した石を使用している。内部下層には、粘土、シルト質の土層の堆積がみられる。貯蔵施設と考えられる。



fig. 117 焼土面上カマド出土状況



fig. 118 石組み 2



fig. 119 第2遺構面図

第3遺構面 第2遺構面下に堆積する盛土（砂）と考えられる灰白色砂の下に、若干の焼土層を伴って第3遺構面が存在する。

第2遺構面の町割り、屋地割りをほぼ踏襲するかたちで町屋群を検出した。

第4遺構面 第2・3遺構面と同様の町屋群が検出された。遺構面は、全体に火を受けた痕跡がみられる。また部分的に焼土の堆積もみられた。

個々の建物については、片側に土間をもつなど構造状の変化はみられないが、規模にお



fig. 120
第4遺構面全景



fig. 121 第4遺構面平面図

いては、間口は、そのままであるが、奥行が1~3m程度短くなっている。また、使用される礎石が小型化し、五輪塔などの転用が多くみられる。

第5遺構面 この面についても、上層と同様の町屋群であると思われる。全体に削平を受けているようで、礎石もあまり存在せず遺構の残存も良くない。部分的に焼土の堆積と焼土がみられる。町屋の他に礎石建物が1棟検出された。

この遺構面において特記すべきは、噴砂痕が検出されたことである。出土遺物などからこの噴砂痕は慶長の大地震に伴うものと考えられる。

第6遺構面 焼土混じりの整地層の下で検出された遺構面である。ほぼ全面が焼土面となっている。礎石建物、石敷建物、土坑、埋葬構造などが検出された。

また、遺構および遺構面上から15世紀後半を中心とする貿易陶磁類が多く出土した。

なお、この面においては、上層の遺構面においてみられた屋地割りが確認されなかった。後述の礎石建物についても主軸方向を若干違えるようである。

礎石建物2 調査区の中央部において東西4m、南北9mほどの範囲で検出された長方形の遺構である。構造は、やや特異であり、一定の間隔をもたせて、20~30cmほどの平石を用いた石列を造り、その間に2cm前後のバラスを詰めて覆っている。

石列上に横木を渡す構造をもつ礎石建物であると考えられる。バラスの使用は、湿気を防ぐためと思われ、倉庫であった可能性が高い。また、周辺には瓦片が多く散乱しており屋根には瓦が葺かれていたようである。

石敷建物1 調査区の南部において検出した遺構で南側は調査区外へ広がる。東西6m、南北3m以上の範囲にわたって拳大の礎が敷かれ、その合間を埋めるようにバラスが詰められている。石敷の範囲を囲むようにいくつか礎石状の平石が認められる。礎石建物2と同様倉庫の可能性が考えられる。

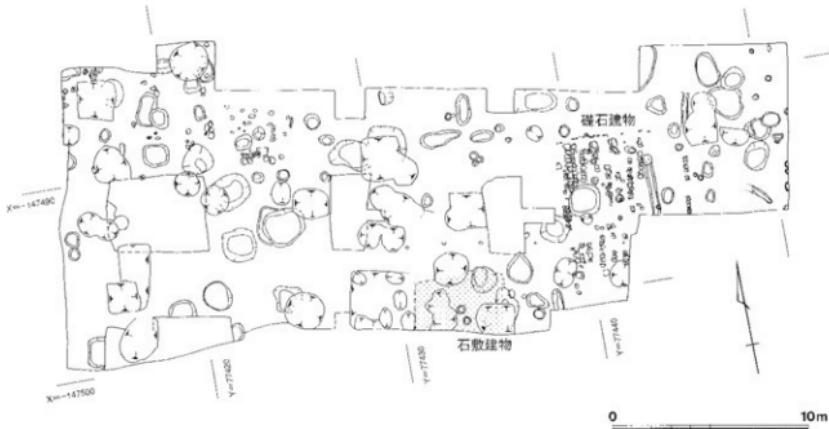


fig. 122 第6遺構面平面図



fig. 123 磨石建物



fig. 124 石敷建物

第7遺構面 第6遺構面のベース層を外した下で確認された遺構面である。土坑、ピット、溝等が検出された。

第8遺構面 第7遺構面のベースである灰褐色シルトには13世紀後半～14世紀の遺物が多く含まれている。この層の下には黄褐色砂の砂堆が全面にわたってみられる。調査区の西部において13世紀後半～14世紀前半にかけての土坑、ピット等を検出した。いずれの遺構も深さ数～20cmのもので残存状況は悪い。また、東側半分ほどは、洪水砂によって、さらに削平を受けており遺構は、ほとんど確認されなかった。

なお、この黄褐色砂を20cmほど掘り下げる、湧水点に達し、またこれ以下の堆積において遺構、遺物は確認されなかった。

3. まとめ 兵庫津遺跡は、現在までに十数次にわたる調査が行われている。しかし、そのほとんどが小規模な調査であったり、遺跡の縁線部であったりしたために、その実態は不明な部分が多く残されていた。また一帯は古くより市街化も進められたために、比較的新しい江戸時代の港町の遺構がどの程度遺存しているか等まったくの未知数であった。

今回の調査によって、13世紀後半から江戸時代後期までの、連綿と続く遺構面を確認することができた。

特に、第2遺構面に伴う焼土層、焼土面が文献に記された宝永の大火に比定できたことは、遺構面が非常に良好な遺存状況を保っていることと相まって貴重な発見である。

また、各遺構面においても豊富な出土遺物があったことから、詳細な時期決定が可能であり、これらを手がかりとして、今後兵庫津の町の形成と発展の過程を克明に追うことができるようである。



fig. 125 調査地遠景

ひょうごつ 27. 兵庫津遺跡 第17次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は近年調査が増加しており、遺跡の様相がしだいに明らかになってきている。今回の調査は、良好な町屋遺構が確認された第15次調査地の西方約20mに位置する。

fig. 126
調査地位置図
1 : 2,500



2. 調査の概要

調査範囲は東西約5m、南北約13mで、部分的に搅乱は認められるものの計7面の遺構面を確認した。

第1遺構面 江戸時代後期から幕末にかけての時期の遺構面と考えられる。町屋建物と炉跡、埋桶遺構などが検出された。

第2遺構面 焼土層をベースとする遺構面で建物の土間状の遺構、埋桶遺構などが検出された。

焼土層 層厚数～20cmほどの焼けた壁土、瓦などの瓦礫を整地した層であり、この層の下には炭化物の層が存在する。このような状況は第15次調査においても確認されており、宝永5年(1708)の大火灾による焼土層と考えられる。

第3遺構面 焼土面上において検出された遺構面で、町屋建物2棟および石組み遺構、埋桶遺構などが検出された。また直上に堆積する炭化物の層からは、建築部材である柱や梁などが確認されている。

町屋建物 調査区の北側を通る街路に間口が取りつくと思われる建物である。東寄りの2列の南北方向の石列を壁境とする連続した2棟の建物と考えられる。

石組み遺構 建物の南側に造られた長方形の石組み遺構である。南側を上層の遺構に搅乱されるが、内法は一辺約70cmで拳大の石が2～3段組まれている。

S X03 調査区の南端において検出された直径1.0



fig. 127 銅銭出土状況

m、深さ50cmの円形の土坑で周囲に木桶の痕跡を留める。破棄された陶磁器類、素焼きの培塿などが多く出土した。

第3遺構面 第3遺構面の下層に堆積する盛土（砂）と考えられる粗砂層の下に薄い焼土層を伴って第4遺構面が存在する。出土遺物から17世紀初めの遺構面と考えられる。

町屋建物 第3遺構面においてみられた建物とほぼ同方向、同規模の建物を検出した。礎石の残存状況は悪い。

第4遺構面 以下の遺構面については、調査区の法面の関係から遺構面は確認できたものの調査面積～第7遺構面は狭く、詳細については不明である。

3. まとめ 兵庫津遺跡は、平成9年の県教育委員会による調査、および今年度実施された第15次調査によって遺跡の実態が知られるようになった。今回の調査も、これらの調査成果を追認するものであるが、宝永の大炎の括りが確認できるなど貴重な成果があった。

今後、このような小規模な調査の積み重ねによって遺跡の構造が解明されていくものと考えられる。



fig. 128 第3遺構面全景



fig. 129 炭化材出土状況（柱材・墨）

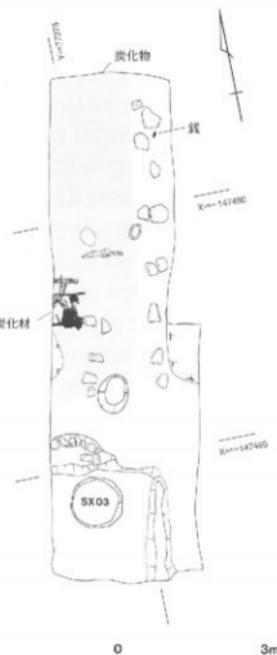


fig. 130 第3遺構面平面図

28. 祇園遺跡 第7次調査

1. はじめに

紙櫛遺跡は神戸市兵庫区上祇園町周辺にひろがる遺跡で、天王川左岸の扇状地の扇頂付近に位置する。天王川は有馬道沿いに流下し平野部に抜け、石井川と合流して湊川となる。この湊川の河口付近にかつて大輪田泊があったと言われている。

この遺跡の存在する地域は「ひらの」とよばれ、この地名が治承4年の「福原遷都」に際し、安徳天皇内裏となった平清盛の別業のあったという「平野」の地名と合致し、当地に福原旧都のゆかりがあったものと推測される。

しかし、考古学的な調査によって福原京に関連する遺構が確認された例は、平野から約600m南方の楠・荒田町遺跡〔神戸大学病院地点〕で検出された堀をめぐらす邸宅跡が唯一といつてよいほどで、福原宮の具体的な解明を行えるまでには至っていない。



fig. 131
調査地位置図
1 : 2,500

2 研究の概要

基本層序は、以下のとおりである。上から、表土・盛土・搅乱土・灰色砂質土（旧耕土）・暗黃灰褐色砂質土（旧床土）・暗灰褐色砂質土層（古墳時代後期頃の遺物包含層）・暗褐色シルト層（弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物包含層）・褐色砂礫土層（地山）となる。

第1講

地表下約1.0～1.4mで検出された平安時代以降の遺構面である。近・現代の擾乱を著しく受けており、遺構面となる暗灰褐色砂質土層が残存していたのは、調査区中央付近と、北壁付近のみであった。検出遺構は、ピット2基で、建物として續まるかどうかは不明である。また、出土遺物が細片であるため、明確な時期についても不明であるが、おそらく平安時代以降であると考えられる。

第2章

古墳時代中期頃の遺構面である。検出遺構はピット5基で、いずれも直径30~80cm、深さ10~20cmを測るが建物としては、纏まらなかった。出土遺物としては、古墳時代中期頃の須恵器・土師器がある。

第3遺構面 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭頃の遺構面である。検出遺構は、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭（庄内併行期）の堅穴住居1棟・土坑3基である。

S B01 S B01は、方形の堅穴住居で、東西5.1m×南北4.6mを測る。

柱穴は、7か所で確認されているが、おそらく主柱穴は、4本柱であろう。

床面中央で、長径80cm×短径65cm、深さ約5cmの地床炉を検出した。

全周に幅15～20cm、深さ10～20cmの周壁溝が巡っており、壁に沿って幅80～90cmのベッド状遺構が全周している。また、ベッド状遺構の内側にも、幅15～20cm、深さ10～15cmの周溝が巡っている。周壁溝外側とベッド状遺構上面の比高差は、北壁側で約15cm、南壁側で約5cmである。また、床面中央部とベッド状遺構上面の比高差は、北壁側で約20cm、南壁側で約10cmである。

東壁中央付近のベッド状遺構上面において、一辺約30cm×約25cm、厚さ10～20cmを測る偏平な花崗岩が検出されており、作業台として使用された可能性が考えられる。

床面直上から、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭頃の土器が出土している。

また、ベッド状遺構は、一部地山を削り残した部分もあるが、基本的には盛土によって作られている。褐色砂礫土の上に、淡灰褐色粗砂と暗灰褐色シルトが版築状に互層に堆積していることが、ベッド状遺構の断ち割りによって確認された。

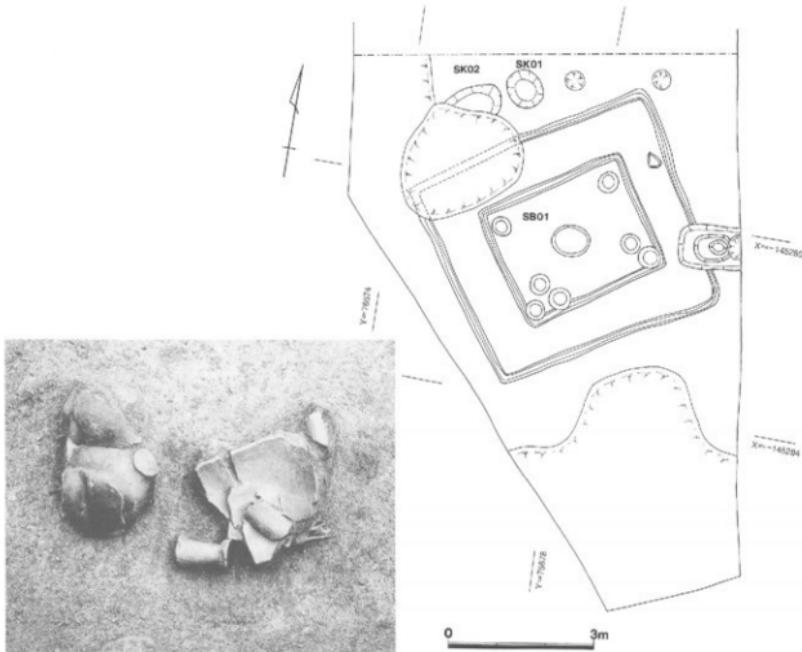


fig. 132 S B01遺物出土状況

fig. 133 第3遺構面平面図



fig. 134
第3遺構面全景

第4遺構面

弥生時代後期の遺構面である。この面の各遺構は、第3遺構面のSB01のベッド状遺構の盛土を除去した段階で確認することができた。

検出遺構は、弥生時代後期の竪穴住居2棟・土坑2基である。

SB02・SB03とともに、SB01と重複しているため、SB01築造時に削平を受けており、残存状況はあまり良好ではなかった。SB02・SB03とともに、西側は調査区外にのびており、また、現代の擾乱によって削平されているため、全体の規模は明確でない。

SB02

SB02は、調査区の中央で検出されたやや歪んだ円形の竪穴住居で、南北5.7m×東西4.6m以上、深さ15~40cmを測る。検出時当初には、SB03のベッド状遺構に相当し、1棟の住居である可能性も考慮に入れたが、平面形が同心円状になっていない点や土層の堆積状況等から見て、SB03の拡張による建て替えと考えて、別の住居とした。

SB03の拡張であるとすれば、北側から東側にかけて、幅約70cm~1.0m拡張したことになる。

柱穴は、SB03の床面にかけて、13カ所で確認されているが、おそらく主柱穴は、6本柱以上の多主柱である可能性が考えられる。

全周に幅15~30cm、深さ10~20cmの周壁溝が巡っている。

SB03

SB03は、SB02と重複して検出されたやや歪んだ円形の竪穴住居で、南北4.6m×東西3.6m以上、深さ15~20cmを測る。

SB02同様、多主柱である可能性が考えられるが、どの柱穴が対応するのか現在のところ不明である。

全周に幅10~20cm、深さ10~20cmの周壁溝が巡っている。

床面中央で、長径1.6m×短径1.3m、深さ10cmの地床炉(SK05)を検出した。

地床炉内には、炭化層及び灰層が充満しており、東側に向かって、灰層を搔き出していることが、土層断面の観察等によって判明しており、入り口部分が住居の東側に存在した可能性を示唆している。

また、地床炉の南東方約50cmの床面上面において、一辺約30cm×約20cm、厚さ10~15cmを測る偏平な花崗岩が検出されており、SB01と同様、作業台として使用された可能性が考えられる。

SB02・SB03の床面上面及び覆土内からは、弥生時代後期の土器が出土している。

3. ま と め 今回の調査では、既存建物等による近・現代の擾乱が著しかったため、平安時代のものであると明確に判る遺構面は確認できなかった。

また、第2次・第5次調査で確認されているような庭園遺構またはそれに関連すると思われるような遺構も確認されず、同時期の遺物も少量しか出土しなかった。

しかしながら、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての堅穴住居が3棟も確認され、一部削平を受けながらも、比較的残存状況も良好であった。

また、3棟重複して検出された中で最も新しい時期であるSB01の覆土内より庄内併行期に比定される土器群が一括で出土しており、当地域における同時期の編年を検討する上において、貴重な資料であるといえるであろう。

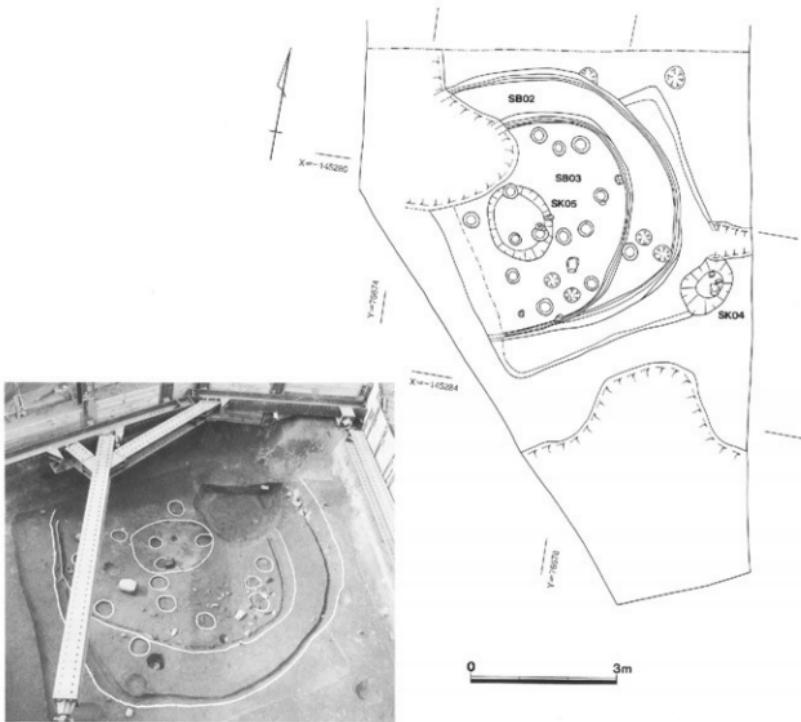


fig. 135 SB02・03

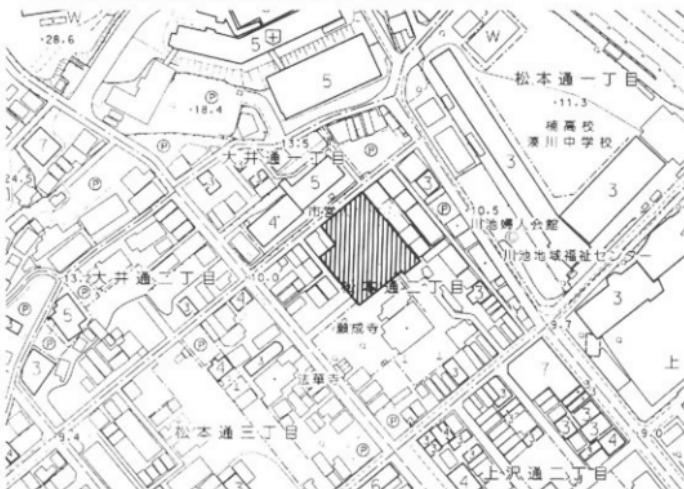
fig. 136 第4遺構面平面図

ひょうごまつもと 29. 兵庫松本遺跡 第1次調査

1. はじめに

兵庫区松本地区は、周知の遺跡の範囲には含まれなかつたが、かつて小林行雄博士が調査された神戸考古学史上著名な東山遺跡に近接していることから、試掘調査がおこなわれた。その結果、中世と古墳時代の遺物包含層が確認され、兵庫松本遺跡と命名された。

今回、市営住宅の建設に先立ち調査を実施することになった。



2. 調査の概要

第1遺構面 平安時代～鎌倉時代の遺物を含む旧耕土層を除去すると第1遺構面である。遺構としては、ビット数個の他は推定条里方向の耕作痕がほぼ全面に残るのみである。遺構面の年代は、耕作痕からわずかに出土した遺物により、鎌倉時代後半頃と推定される。

なお、調査区ほぼ中央西寄りのところで検出された瓦積みの井戸は幕末ないし明治時代のものと考えられる。

第2遺構面 この面では弥生時代後期後半～古墳時代前期前半頃の遺構が検出されている。

掘立柱建物 SB01 3間×2間 (4.3m×3.8m, 16.34m²) 主軸はほぼ北方向。

SB02 1間×2間 (2.4m×2.6m, 6.24m²) 主軸はほぼ北方向。

SB03 1間×2間 (2.9m×3.0m, 8.7 m²) 主軸はほぼ北方向。

SB04 2間×2間 (3.6m×3.1m, 11.16m²) 主軸はほぼ北方向。

柱穴出土土器は細片が多く、柱穴間の切り合い関係も少ないため時期差は明確ではないが、ほぼ古墳時代前期前半（布留式併行期前半）の中におさまるものと考えられる。

SB10 調査区の南西隅付近で検出された、推定一辺6m前後の隅丸方形の竪穴住居である。深さ約30cm、周壁溝を有し、幅1m、高さ約10cmの屋内高床部を設置している。柱穴は2個検出され、また周壁溝も2条重なるように検出されており、建て替えがあったものと考え

られる。床面直上から庄内式期に属すると考えられる甕片が出土している。

S X01 約2m×5mの範囲内にびっしりと敷きつめられたように検出された土器群である。弥生時代前期から古墳時代前期前半まで断続的に存在した流路の最終埋土上面に、布留式期最古段階の土師器が出土している。出土状態から単に投棄したものではなく、人為的に置かれたと見られるものもあり、なんらかの祭祀行為に伴うものと考えられる。

S X03 径1.8m前後、深さ約30cmの不整径の土坑である。S X01の土器群よりも若干古くなるものと見られ庄内式期の最新段階頃に属するものと考えられる。

S R01 弥生時代前期から古墳時代前期前半まで断続的に存在したと見られる流路である。弥生時代後期後半～古墳時代前期前半にいたる大量の遺物が出土した。

S R02 弥生時代前期に属する流路である。出土した遺物は少ないが、特筆すべきものとして木葉文が施された壺片が1点出土している。また、石礫も数点出土している。



fig. 138 第1遺構面全景



fig. 139 SB10

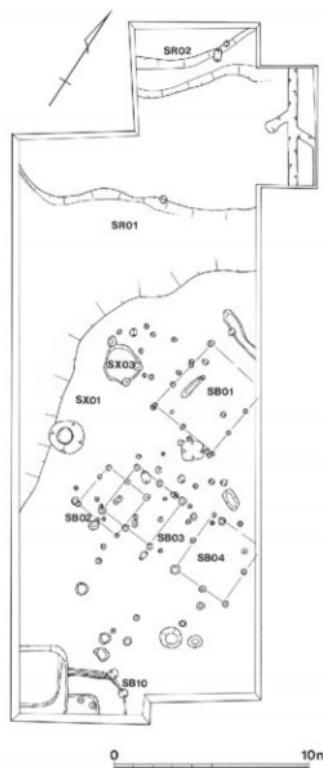


fig. 140 第2遺構面平面図

下層遺構面 さらに古墳時代前期の流路の前段階の流れと考えられる弥生時代前期の流路が検出された。また、これら流路のベース層にも弥生時代前期の遺物が含まれていたため影響深度まで調査を行った。

S X11 幅3m以上、深さ約1mの北から南方向に流れる流路である。前年度検出した古墳時代前期前半の流路に重なるように位置しており、一時期埋没しながらものちにはば同位置に流路が形成されたものと考えられる。

流路中からは弥生時代前期の土器のほかサヌカイト製の石鐵・石錐などの製品やチップも出土している。出土した土器はいずれも破片であるが、貼付突帯と多条の箇描沈線文が主流をなしており、前期でも新段階に属するものと考えられる。

S X12 幅2.6~2.9m、深さ約1mの北東から南西方向に流れる断面逆台形の流路である。前年度調査のS R02は、S R04埋没過程での一段階における流路を検出したものである。



fig. 141 S X01



fig. 142 S X03

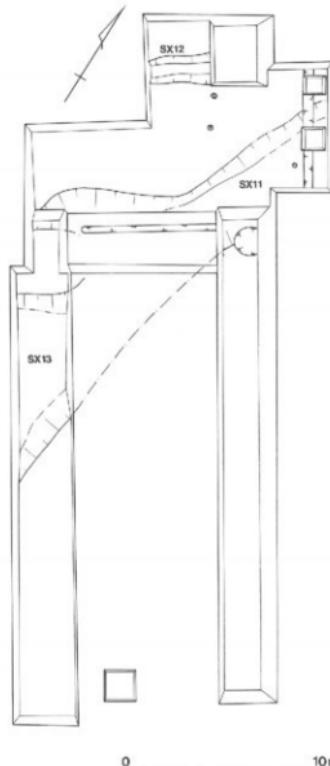
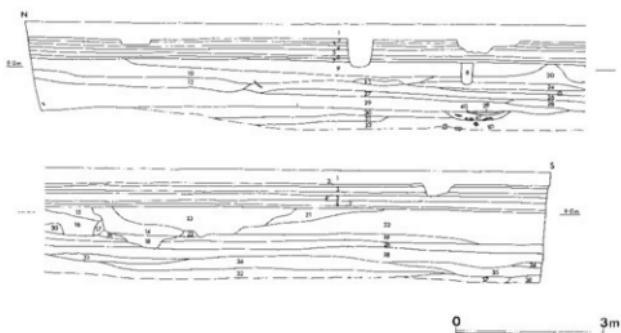


fig. 143 下層遺構平面図

流路中からは、S X11同様弥生時代前期の土器のはかサヌカイト製の石鎌・石錐やチップも出土しており、時期もS X11とほぼ同様のものと考えられる。ところが、S R02では前期古段階の木葉文を施した壺片が出土しており、層位的に矛盾しているが、木葉文の壺片はややローリングを受けているのに比して、S X12出土土器はほとんどローリングをうけておらず、前者の土器は前期新段階において付近から流れ込んだものと推定される。

3. ま と め 今回新たに発見された兵庫松本遺跡では、弥生時代前期、弥生時代後期後半～古墳時代前期前半、鎌倉時代後半の遺構・遺物が確認された。近接する東山遺跡や河原遺跡などは古くから知られた遺跡ではあるものの、集落等実態は明らかではなかった。今回の調査でも弥生時代前期については明瞭な遺構は流路のみであったが、遺物量は比較的多く、直近に大規模な集落の存在が予想される。また、弥生時代前期の遺構面としては断ち割り調査の結果、さらに古い段階の遺構が確認されている。中期になると旧湊川を挟んだ東側に位置する楠・荒田遺跡で大規模な集落が形成されており、一時集落が移動したものと考えられる。再び、弥生時代後期～古墳時代前期には再び堅穴住居や掘立柱建物がつくられ集落が形成された。前年度調査のS X01における大量の土器は、北から南方向の流路がやや東に流れを変える部分の左岸肩部に位置しており、単なる廃棄による投棄ではなく、意図的なもの的存在を窺わせる。以後の集落の状態は明らかでなく、中世～近世の間はこのあたりは水田であったと考えられる。

これまで、松本通周辺では遺跡の存在が明確でなかったが、今回の調査を契機として、今後急速に展開するであろう復興区画整理事業にともなう発掘調査の成果を俟ちたい。



- | | | |
|------------------------------|------------------------------|-----------------------------|
| 1. 硫土及びコンクリート倒溝 | 15. 黒灰色シルト混じり砂 | 29. 灰褐色シルト（弥生時代前期遺物包含層） |
| 2. 褐色砂 | 16. 灰褐色シルト | 30. 黑灰色シルト |
| 3. 淡色粘質砂（田耕土） | 17. 泥炭化粘砂 | 31. 褐色粘質シルト |
| 4. 褐色砂 | 18. 灰色砂 | 32. 淡褐色粘質シルト |
| 5. 灰色シルト混じり砂（中世遺物包含層） | 19. 流成灰褐色シルト | 33. 黑褐色シルト |
| 6. 明赤褐色シルト混じり砂（中世・古墳時代遺物包含層） | 20. 流成褐色シルト | 34. 淡褐色シルト |
| 7. 暗黄褐色シルト混じり砂（中世・古墳時代遺物包含層） | 21. 流成黃色砂 | 35. 淡褐色シルト |
| 8. 暗褐色シルト混じり砂（古墳時代柱穴堆土） | 22. 黑灰色シルト | 36. 淡褐色細砂 |
| 9. 黑褐色シルト混じり砂 | 23. 淡褐色シルト | 37. 淡褐色シルト |
| 10. 暗褐色シルト混じり砂（バラン土含む） | 24. 墓壙シルト混じり砂 | 38. 淡褐色中砂 |
| 11. 暗褐色砂質シルト | 25. 細褐色沙泥混じりシルト（弥生時代前期遺物包含層） | 39. 灰褐色シルト（弥生時代前期土坑堆土） |
| 12. 暗褐色シルト混じり砂 | 26. 淡褐色シルト（弥生時代前期遺物包含層） | 40. 淡白色細砂（弥生時代前期土坑堆土） |
| 13. 褐色砂 | 27. 培育地シルト混じり砂（弥生時代前期遺物包含層） | 41. 灰褐色粘土（多く含む）（弥生時代前期土坑堆土） |
| 14. 淡褐色灰砂 | 28. 培育地シルト（弥生時代前期遺物包含層） | |

fig. 144 調査区断面図

かみさわ 30. 上沢遺跡 (第16・19・20・24・28・29・30次調査)

1. はじめに

上沢遺跡でのこれまでの調査は、平成元年（1989）に都市計画道路房王寺線の拡幅工事に伴い、神戸市教育委員会が実施した第1次調査が始まる。その時の調査では縄文時代晚期から弥生時代前期の自然流路、弥生時代後期の集落跡等が見つかっている。その後、平成7年に第2次調査として、兵庫県教育委員会復興調査班が行った調査では、弥生時代の水田面が見つかっている。その後、平成8年から行われた山手幹線の拡幅工事に伴う調査では、弥生時代前期、弥生時代後期、古墳時代初頭、奈良～平安時代、中世と各時代の遺構が発見され、これまで詳しく知られていなかった上沢遺跡が、同時期の拠点的大集落として認知される、複合大遺跡であることが明らかになりつつある。

今年度は、山手幹線拡幅に伴う調査で、第16次・19次・20次・24次・29次調査が、防災公園築造に伴い第28次調査が、また区画整理事業の擁壁工事に伴い第30次調査がそれぞれ実施された。以下その概要である。



fig. 145
調査地位置図
1 : 2,500

第16次調査

1. 調査の概要 前年度から継続して調査を実施している第16次調査の一帯西側にあたる6区の第4遺構面について今年度引き続き調査を行った。

第4遺構面で確認された遺構は、土坑3基、ピット15基、旧河道1条である。

S K403は直径80cm、深さ12cmの円形の土坑で、底は皿状に緩やかに落ちる。埋土より弥生時代前期の土器がまとめて出土している。

ピット列 調査区の東半部で見つかったピットは、その間隔が1.4m内外で並ぶピット列である。

調査区外に対を成すピット列があるかどうかは不明であるが、柵列様のものが存在したと思われる。

S R401 S R401は幅4.1m、深さ80cmの自然河道で、埋土の砂礫層より弥生時代前期の遺物が出土している。底面は砂礫の流れによって削られ、凹凸になる。

2. まとめ 今回の調査区でも弥生時代前期の遺構が確認され、良好な遺物が多く出土した。前年度の調査成果とも合わせて、しだいに弥生時代前期の集落の拡がりについても明らかになってきたように思われる。

いまだ不明な弥生時代中期の集落については、自然地形などの影響によるものかどうかなども含めて今後の調査の成果に期待したい。

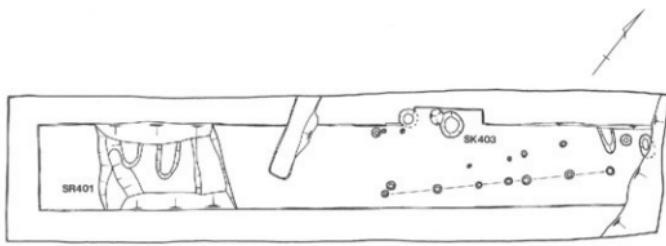


fig. 146
調査区平面図



fig. 147 S K403



fig. 148 S R401

第19次調査

1. 調査の概要 第19次調査地はその北側を第3次調査第2区に接し、西側を第16次調査第2区に接している。基本層序は盛土、灰褐色砂質シルト、淡灰褐色砂質シルト、暗茶褐色シルト質極細砂（包含層）となり、その下層が遺構面である。

第1遺構面 第1遺構面からは土坑1基、ピット百数十基が出土している。SK01は調査区の中央南端で見つかった、直径70cm以上の土坑で、埋土には人頭大の礫が混入し、粘性の強い埋土であった。井戸の可能性もある。

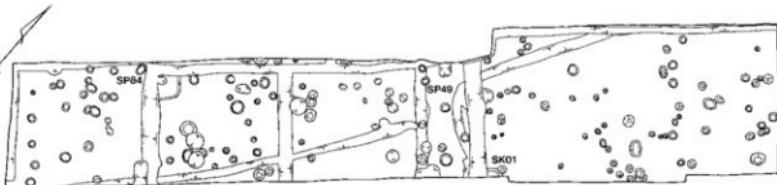
ピットは多く見つかっているが、掘立柱建物を構成するものは判っていない。ピットの中ではSP49から縄文の皿が出土している。またSP84からは柱根が出土している。その他にも完形の土師器皿や須恵器碗が出土したものがある。

これらの第1遺構面の時期は13世紀頃と10世紀頃のものが存在する。

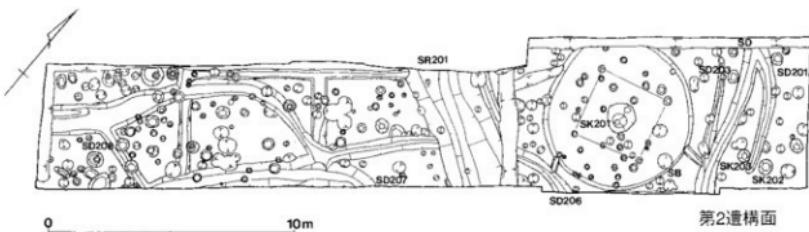
第2遺構面 第2遺構面で検出された遺構は竪穴住居1棟、土坑9基、溝8条、ピット数十基である。

SB201は調査区の東半部で見つかった直径6.2m、深さ20cmの円形の竪穴住居で、中央に炉を持つ。炉は直径1.2m、深さ19cmの円形で緩やかに落ちる。炉内より炭化物が出土している。主柱は4本で構成していたと考えられる。柱間は2.8~3mである。周壁溝は無い。竪穴住居の南辺からは、2か所で溝が外に延び、別の溝につながっている。竪穴住居の時期は弥生時代後期後半である。

SD201 SD201はSB201の東側を巡る、幅55cm、深さ60cmの断面U字状の溝である。溝は北側から延び、調査区内で途切れる。今回の調査区の北側で行なった第3次調査の時に見つかっ



第1遺構面



第2遺構面

fig. 149 調査区平面図

ていた溝に続き、SB 201の周囲を円弧状に巡っている。

- S D 202 S D 202はS D 201を切る南北方向の溝で、幅60cm、深さ50cm、断面はU字状である。
- S D 206 S D 206は調査区の西半部を蛇行して流れる溝で、この溝は今回の調査区の西側の第16次調査の時に見つかった溝に続き、南側に流れて行く。溝の埋土からは多くの遺物が出土した。中でも、中央部で二重口縁壺の口縁部に鋸歯紋のついた土器の、破損した口縁部のみを、等間隔で溝底に並べ置いたように土器が出土している。
- S D 207 S D 207は幅105cm、深さ90cm、断面逆台形に近い溝である。溝内からの遺物の出土は多く、特にS D 206と接する辺りでは完形品を含む、多くの遺物が出土している。
- これらの溝の時期は概ね弥生時代後期後半から庄内期のものである。
- S R 201 S R 201は調査区の中央を南北に流れる自然流路で、幅2.6m、深さ20cmで緩やかに落ち込む。埋土はシルトと下層には砂礫が多く含まれ、古墳時代から奈良時代頃のものと思われ、最終埋没は平安時代の初め頃と思われる。埋土からは奈良時代頃の厚さ3cm程の平瓦片等が出土している。

第3遺構面からは土坑9基、溝1条、ピット数十基が見つかった。SK 301~303は規模の類似した土坑で、長径約2.5m、短径約1.5m、深さ約15cmの楕円形をしている。底はいずれも平らである。SP 303からは弥生時代前期の壺の底部がまとまって出土している。第3遺構面の時期は弥生時代前期後半と考えられる。

2. まとめ 今回の調査結果は、これまでの数次にわたる上沢遺跡の調査結果を追認するばかりではなく、より一層遺跡の在り方を明白にできるものとなった。弥生時代後期の円形堅穴住居は初めての発見であり、以前の調査で見つかっている古墳時代初頭の堅穴住居と併せ、集落の構成が弥生時代の後期から庄内期、さらには古墳時代初頭へとつながって行く変遷を追うことができる。特に今回の調査で確認された堅穴住居は周囲を溝で囲む、特異なものであり、そのことが、特別視されるべきものであったのか、上沢遺跡の居住地では一般的なものであったのか、今後の調査が進めば、明らかになるであろう。また、住居の周辺を縦横に走る溝からの大量の遺物は、上沢遺跡の集落としての規模の大きさを彷彿とさせるものであり、当時期の拠点的大集落として繁栄していたことを如実に示していると言えよう。遺跡は衰えを知らず、さらに拡がるものと予想される。



fig. 150
調査区全景

第 20 次 調 査

1. 調査の概要 今回の調査では、中世から弥生時代前期の遺構面が検出された。各遺構面は洪水層に覆われており、6面の遺構面をとらえることができた。調査区の基本層序は、盛土、旧耕土

中世遺物包含層、中世遺構面基盤層（第1遺構面）、洪水層、平安時代遺物包含層、平安時代前期遺構面（第2遺構面）を検出している。この遺構面は洪水層で形成されており、東側は安定しているものの西側においては、砂礫の堆積となっている。奈良時代の遺構面（第3遺構面）はこれより約30cm下層で、古墳時代後期の遺構面（第4遺構面）は、古墳時代後期～弥生時代後期の遺物包含層を基盤層とし、約20cmの遺物包含層下に古墳時代後期と弥生時代後期後半および終末期の遺構面（第5遺構面）を検出している。弥生時代前期の第6遺構面は洪水によるシルト層、約30cm下層で検出された。

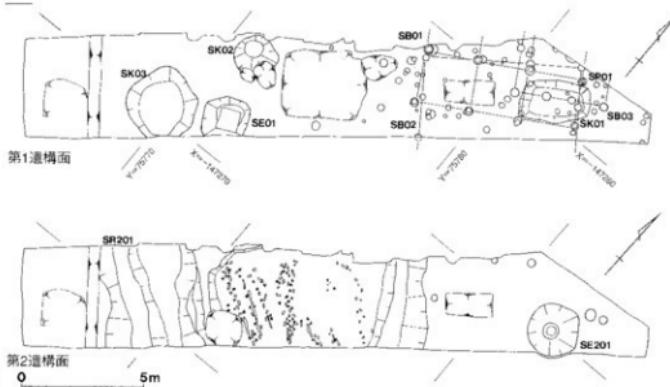
第1遺構面 平安時代前期以降の洪水層によって形成された鎌倉時代を中心とする遺構面で、掘立柱建物3棟、井戸1基、土坑3基を検出することができた。遺構面は東から西へ緩やかに傾斜しており、調査区西側で井戸1基と土坑2基が検出され、これより東側でピット68基、土坑1基を検出した。

掘立柱建物 SB01は、南北2間以上、東西3間以上の総柱の建物である。柱間の距離はいずれも2mで、すべての柱穴底に板石を据えている。廃絶時に柱材を抜き取ったと考えられ、抜取り痕から13世紀前半から中頃の瓦器焼片や土師器片が出土している。柱穴柱痕の埋土には若干の炭化物や焼土が含まれていた。

SB02は、東西3間、南北2間以上で調査区の南側に伸びる。SB01の柱穴によって切られている。柱間の距離は東西柱列が2.1m、南北柱列が1.7mである。

SB03は、東西3間、南北2間以上の南北棟の建物と考えられるが、大半が調査区の北側に存在している。詳細な時期は不明であるが、僅かに出土した柱穴の遺物や遺物包含層の遺物からSB02とともに鎌倉時代の範疇に入るものと考えられる。

また、ピットの底に土師器皿が納められていたものが2基検出された。調査区の東端、



S B01・02の東側で検出されたPit 01は、径20cm、深さ10cmの浅い小穴で、土師器皿1枚伏せた状態で納めていた。S B01・02の西側で検出されたPit 50は、後世の搅乱を受けていたが、底面が遺存しており土師器の小皿1枚を伏せて置き、その上に2枚の小皿を表向きに納めていた。何れかの建物に伴う何らかの祭祀かと考えられる。

土 坑 調査区の東端、S B02とS B03の柱穴を切り込む土坑S K01を検出した。平面形は、長辺2.8m、短辺1.4~1.7mの隅丸の長方形で深さ10cm程度の皿状の浅い土坑である。出土遺物に13世紀前半から中頃の瓦器・土師器・須恵器の椀・小皿等が出土している。埋土には、炭化物や焼土塊が含まれておりS B01の廃絶に伴うもの可能性がある。

S K02 S K02・03は建物群から離れた西側で検出された。S K02は径1.6mの円形の土坑で、深さ約60cmの断面擂鉢状を呈している。埋土より若干の瓦器・須恵器片や木片が出土している。S K03は径2mの円形で埋土は周辺の基盤層を埋め込んでおり、掘削後すぐに埋め戻したものと考えられる。形状から井戸S E01とはほぼ同規模であり、井戸掘削を地盤が悪いために途中で断念した可能性がある。同地点の下層には平安時代から奈良時代の流路跡があり土坑底は流路の堆積物である砂礫が露出していた。

S E01 建物群の西方、緩やかな傾斜が西に向かい更に傾斜度を増す変換点で検出された木組井戸である。この地点の下層には平安時代から奈良時代の流路跡が存在しており、井戸はこの流路跡の東岸を貫いている。

井戸側は廃絶時に抜き取られたと思われほとんど遺存しなかったが縦板1枚とこれを外側で補強する添板が四辺で1枚ずつと、井戸側底に方形に組まれた横桟が出土している。これらのことから、縦板を方形に組合せた井戸側を横桟と縦板の外側に打ち込まれた添板で保持する形態の井戸と考えられる。添板は先端を尖らせた矢板状を呈していた。横桟は4cmの角材の先端を凸形と凹型に加工したものを組み合わせて目違いほぞ組みの形態をなしている。井戸側掘形は、検出面より1m程度方形に掘削し、湧水層の黒灰色細砂質シルト層に達している。井戸側掘形底の中央に径45cm、深さ50cmの円形の井筒掘形を掘り、底に

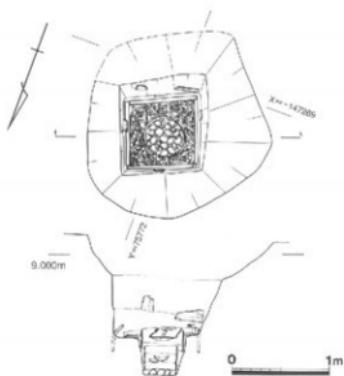


fig. 152 S E01平面図・断面図



fig. 153 S E01

井筒の沈降を防ぐものか、浄水の為か円礫を敷いている。ここに曲物2段を納めている。井戸側掘形の底にも小礫を敷き詰めており、井戸側はこの礫の上面より組み始めている。

出土遺物は、井戸側底の内側で廃絶時に抜き取られた井戸側材の残材と共に、下駄や墨書き木札が出土した。墨書き木札は薄板（厚さ約3mm）に『南无觀世音菩薩』の宝号が一尊のみ墨書きされ、先端は欠損しているものの両辺2ヶ所ずつに鋭角の深い切り込みが見られることから圭頭状の形態のこけら経あるいは筈塔婆と思われる。

井筒内からは釣瓶あるいは容器と思われる漆塗り（内側）の曲物、漆塗りの椀、瓦器、須恵器の椀と小皿が出土している。これらの出土遺物からこの井戸は13世紀中頃を前後する時期のものと考えられる。

第2遺構面 奈良時代後半以降の洪水層によって形成された平安時代前期の遺構面で井戸1基が検出された。柱穴3基も調査区の東端で検出されたが、建物は復元できなかった。また、これらの遺構が廃絶して後、流路1条と水田跡が検出された。

S E 201 曲物を井戸側としたもので、現状では2段以上積み上げていたが遺存度は極めて悪い。井戸側の曲物の大きさにあわせて径67～95cm、深さ60cm前後の円形に掘形を掘削し、井戸側掘形底の中央に径約40cm、深さ15cmの井筒掘形を穿ち、径約40cm、高さ35cmの曲物を据えている。井筒内には浄水の為か1～10cm程度の小円礫を厚さ15cm程度敷き詰めている。井筒を据え置いた後、井戸側の径65cmの曲物を2段積み上げている。井筒と井戸側の間に3cm程度の小円礫で詰め込んでいる。

出土遺物には、井戸側の内側から黒色土器皿や綠釉陶器椀片、飯蛸壺が出土している。綠釉陶器椀片は洛北窯のもので、黒色土器皿（A類）は黒筈90号窯型式の灰釉陶器皿の模倣形態と考えられることから井戸の時期は、9世紀後半ごろと考えられる。

この遺構面では、9世紀後半のみの遺構が検出されており、調査区の東側で検出されたような10世紀代の遺構は検出されていない。遺物包含層中の遺物も10世紀代のものは含まれず、この遺構面を覆う洪水層に黒色土器片が含まれることから、井戸等の遺構が廃絶した後の洪水により、10世紀代の遺構は東側を中心として広がるものと考えられる。

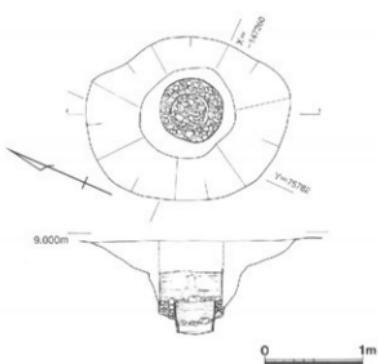


fig. 154 S E 201平面図・断面図



fig. 155 S E 201

第3遺構面 奈良時代後半の遺構面で、流路1条と溝1条、柱穴4基を検出した。調査区東端で検出された柱穴は、箱型状の細い溝SD301の東側で検出されており、SD301と流路SR301の間に存在しない。当調査区の西側の第9次調査地、東側の第3次調査地からも掘立柱建物が検出されており、流路を挟んで広く建物が存在するものと思われる。

流路 流路は幅4~5.6m、深さ1.5mで、自然流路を人工的に形成していたと考えられ、断面逆台形を呈する。流路西岸からは、牛あるいは馬かと考えられる下顎骨が出土しており、祭祀に伴う可能性がある。周辺からは土器皿や須恵器平瓶がわずかに出土した。

第4遺構面 古墳時代後期の遺構面と考えられるが、調査区の北端と南端に落ち込み2基を検出したのみで他に顯著な遺構は見られない。2基の落ち込みからは、6世紀後半から7世紀初頭の須恵器が出土している。

第5遺構面 古墳時代後期および弥生時代後期後半の遺構面である。検出面では古墳時代後期の遺構が弥生時代後期後半の遺構よりもわずか2cm程度浅く検出できたが大半が後世の削平により同一面で検出された。

古墳時代後期の遺構は、幅1m、深さ約40cmの断面U字形の南北溝SD503と数基のピット、竪穴住居状の方形の落ち込みがある。この時期においては、西隣の第9次調査地で、大壁造りの建物や竪穴住居が検出されているが、比較して遺構は希薄である。SX501が竪穴住居の可能性があるが、SD503より東側に遺構が広がるものと考えられる。また、第9次調査地では、臼玉や劍形、双孔円盤等の滑石製品が多量に出土しているが、当調査地からは1点も出土しなかった。

弥生時代後期後半の遺構は、調査区東端で検出された推定幅2.2~2.5m、深さ約50cmの断面U字形の南北溝SD501とこれに取り付く幅約40cm、深さ約15cmの西側に伸びる溝SD502と土坑3基、ピット数基がある。

SD501は滯水していたと思われ、中層から下層は細砂とシルトが堆積しており、SD502との取り付き部分には4本の杭跡が検出されている。この状況からSD501の水をSD502に流す為の調節板が存在したものと考えられる。

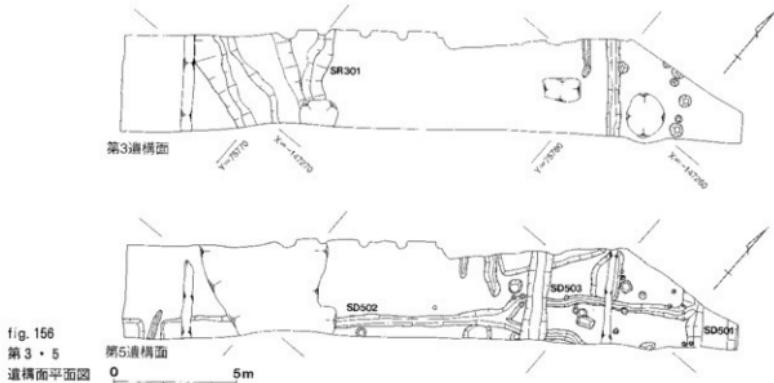


fig. 156

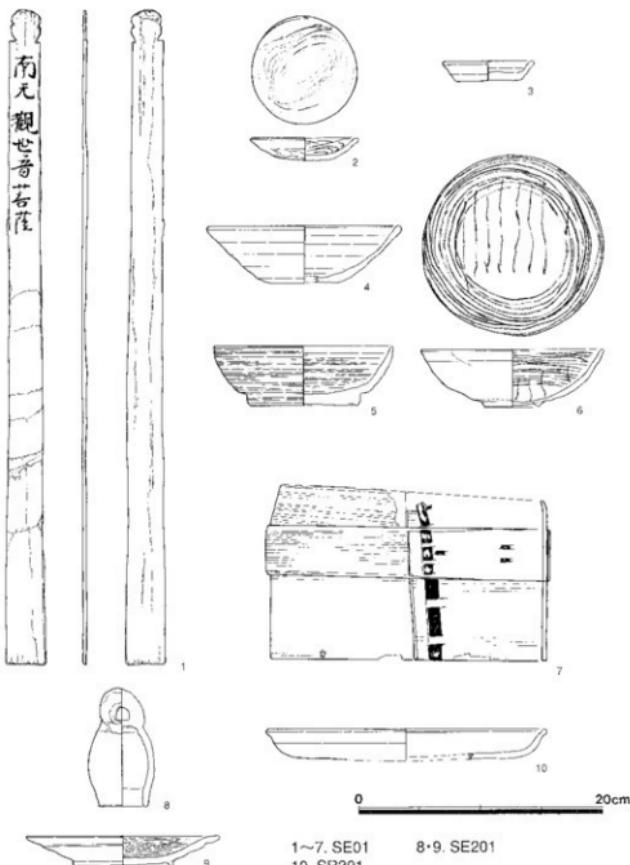
第3・5

遺構面平面図

第3次調査地をはじめとする東側調査地では、同時期の竪穴住居や掘立柱建物が検出されているが、SD501以西では、不定形な土坑や溝のみで、住居址の検出はない。また、地形的にも東から西への傾斜が認められることや、湿地状の堆積をしているなど居住域は、SD501以東であると考えられる。SD501は東の居住域の排水や水田への水路等の可能性がある。

第6 遺構面 水田土壤と考えられる土層を検出した。僅かに西側への傾斜がみとめられるが、第5遺構面以降の微高地状の高まりは認められない。

南北に伸びる畦畔状の幅約30cmの高まりを検出したが、洪水砂での埋没ではなく遺存度は悪く、この1条のみの検出に留まった。この上面からは、弥生時代前期の土器片が僅かに出土した。



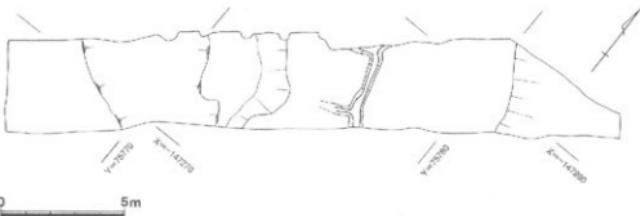


fig. 158

第6遺構面平面図

この時期においては、西隣の第9次調査地では、遺構、遺物は検出されておらず、湿地状の堆積が認められた。都市計画道房王寺線を挟んで東隣の第3次調査区では、西に向かって傾斜し、多量の弥生時代前期の土器片が出土しており、さらに西側では安定した土壤上に多数の遺構が検出されている。これらのことから今回の調査区より以東は、湿地状の地形をなしており、東側の集落域周辺では水田として利用されていた可能性がある。

2. まとめ 今回の調査では、中世から弥生時代前期に至る6面の遺構面を検出することができた。調査地点の地形が安定はじめるのは弥生時代後期後半からで、この時期から微高地が形成はじめめる。それ以前は、湿地状の地形であり東側の集落周辺では水田として利用された可能性がある。古墳時代後期、弥生時代後期においては、集落の縁部を画する様な溝は検出されたものの集落の中心は、古墳時代後期においては西側で、弥生時代後期では東側の既往の調査地で多数の遺構が検出されている。

古墳時代後期以降は、度重なる洪水にみまわれており、10世紀から12世紀代においては東側に移行したようである。現在の都市計画道房王寺線より以東は、弥生時代前期以来安定した土壤上に位置している。

この地点が最も安定するのは鎌倉時代に至ってからであり、平安時代中期以降の洪水により形成された微高地上に、多数の掘立柱建物がたてられる。既往の調査地では当時期の遺構はさほど多くなく、最も安定した地点のひとつであったことが窺える。また、多くの土器類のほか、『南无觀世音菩薩』の墨書き札は、こけら経や塔婆などと考えられ、写經や、生前に自分のために仏事を修め冥福を祈る逆修、死者のための追善法会などの民衆信仰の一端をうかがい知ることのできる資料を得ることができた。



fig. 159

調査区全景

第 24 次 調 査

- 1. 調査の概要** 今回の調査は西側で第3次調査第2区・第19次調査地に接している。基本層序は盛土の下層に茶褐色細砂の包含層があり、遺構面となる。遺構面のベースである黄灰褐色シルト質極細砂層が弥生時代前期の包含層となる。
- 第1区** 第1区は西北隅で遺物包含層より滑石製の勾玉が1点出土した。この部分のみ、遺構面は存在するが、顕著な遺構は認められない。
- S K01** 旧河道の肩口からなだらかに落ちる所で土坑S K01が1基見つかった。規模は長径90cm、短径65cm、深さ60cmの楕円形の土坑である。土坑底は平らで、底からは奈良時代の須恵器・土師器が見つかった。
- S R01** S R01は調査区の殆どを占める旧河道で、河道幅は12m以上である。河道肩部から一段下がり、6m程の平らな部分があって、さらに一段下がって最深部となる。最深部では深さ1.8mとなる。河道埋土はシルトと砂礫層で、最深部で6世紀初頭の須恵器の坏が出土している。上層からは奈良・平安時代の遺物が出土している。このことから、河道は古墳時代から平安時代までの間に流れ、最終的に平安時代から中世の間に埋没したと思われる。
- 第2区** 第2区は以前の地下鉄工事の時の擾乱が殆どであった。調査区の中央辺りで見つかった浅い落ち込みは、旧河道S R01のものであろう。
- 第3区** 第3区は調査区の約半分が地下鉄工事の擾乱であるが、残りの部分については、これまでの上沢遺跡のあり方と同様、遺構・遺物の残存状況は極めて良好である。
- 第1遺構面** 第1遺構面で見つかった遺構は掘立柱建物1棟、土坑4基、溝1条、ピット数十基である。
- S B01** S B01は調査区の北側で見つかった梁行き2間以上の掘立柱建物で、桁行きは不明であるが、恐らく柱間から推測して2間の側柱の掘立柱建物であると思われる。桁行の柱間は2mである。出土遺物から平安時代のものであると思われる。
- 土坑** S K02は長径1.5m、短径50cm、深さ25cmの楕円形の土坑で底はU字状になる。S K03はS K02を切る直径70cm、深さ12cmの土坑で、そこは平ら

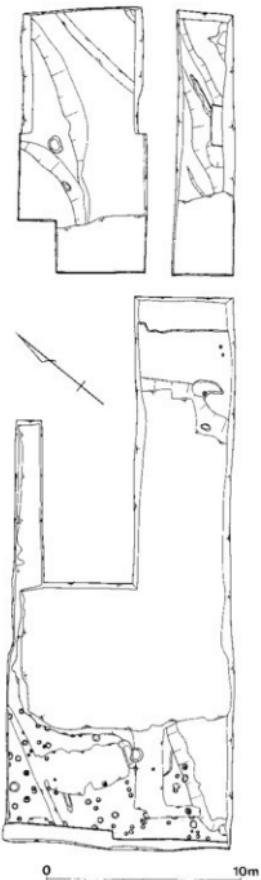


fig. 160 第1遺構面平面図



fig. 161 3区第1遺構面全景



fig. 162 SX01内黙骨出土状況

になる。SK04は擾乱で全体の規模は不明であるが、長径2.4m以上、短径50cm以上、深さ8cmの楕円形の土坑である。埋土からは遺物がやまとまって出土している。これら3基の土坑は弥生時代後期終末のものと思われる。

SX01

SX01は調査区の南端で見つかった落ち込みである。全体の平面形は不明であるが、コーナー部を持って屈曲するような平面形になるようである。肩部から落ち込み、底は平らになる。深さは55cmである。肩部から落ち込む面には奈良時代初頭の完形品を含む須恵器や土師器が出土し、鉄製品が1点出土している。また、馬の左下顎骨が出土している。

擾乱の規模が大きく、調査区全体のつながりは不明確であるが、このSX01の北側肩部のラインが第1区のSR01の方向に延びることや、一段落ちてから、平らな部分を持つことや、SR01の肩部から落ちた所で見つかったSK01と同時期と思われる遺物がSX01からも出土していることから判断して、SX01は旧河道の一部になる可能性が考えられる。そして、馬の骨の出土は水辺の祭祀的な意味合いが想起される。

第2遺構面

土坑

第2遺構面で見つかった遺構は、土坑2基、ピット2基である。SK201は、長径2.1m、短径1.5m、深さ18cmで底の平らな不定形の土坑である。SK202は、長径1.8m、短径1.4m、深さ14cmで底の平らな不定形の土坑である。いずれも弥生時代前期の遺構である。隣接する第19次調査でも同規模の同様な土坑が見つかっており、この範囲で弥生時代前期の土坑が数基まとめて見つかっている。

2. まとめ

今回の調査地は擾乱の規模が大きく、見つかった遺構は多くはないが、上沢遺跡の東端が旧河道によって区切られていることが判明した。旧河道の方向は概ね南北方向に流れていたと思われるが、旧河道より西側一帯に上沢遺跡の集落が展開されているようである。そして、これまでの調査によって確認されてきた、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて存在した多くの溝は、上沢遺跡の東から南にかけて流れたであろう旧河道に向かって流れ込んでいると推測される。

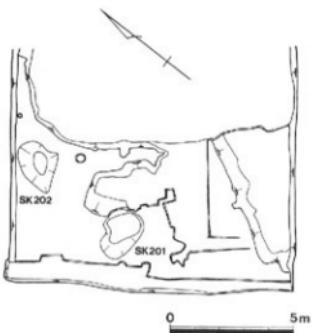


fig. 163 第2遺構面平面図

第 28 次 調 査

1. 調査の概要 基本層序は盛土、旧耕土、旧床土、明灰色極細砂（中世包含層）、茶褐色砂質シルト（弥生～奈良時代包含層）、茶褐色極細砂の洪水砂（弥生時代前期包含層）となる。

第1遺構面 第1遺構面で確認された遺構は、掘立柱建物1棟、ピット数十基である。S B01は調査区南西隅で見つかった、東西2間以上、南北1間以上の縦柱の掘立柱建物である。柱穴の規模は直径30cm前後で、深さは20～40cmである。ピットの中には拳大の礫が充填されているものもあった。

S B01の西側で見つかったS P23は、建物としてはまとまってないが、柱穴埋土から須恵器の碗の完形品が出土している。

以上これらの第1遺構面を構成する遺構は13世紀のものである。

第2遺構面 第2遺構面で確認された遺構は掘立柱建物1棟、竪穴住居1棟、井戸1基、土坑14基、溝12条、ピット数十基が見つかっている。

S B201は調査区の中央辺りで見つかった掘立柱建物で、南北2間以上、東西1間である。南北の柱間は2.4～2.6m、東西の柱間は4mである。柱穴の規模は長辺70～90cm、短

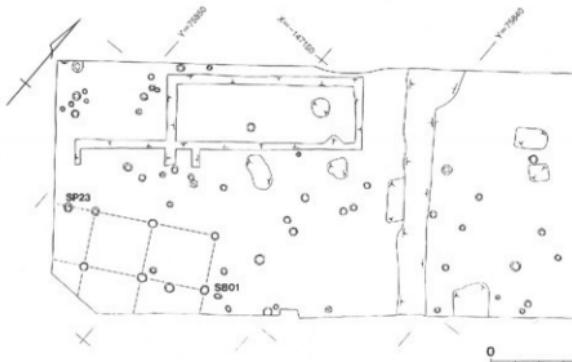


fig. 164
第1遺構面平面図



fig. 165 第1遺構面全景



fig. 166 S B201

辺60~80cm、深さ40cm前後の方形の掘形となる。北西隅のS P201の上層から土師器の环が完形品2個体が出土している。東列・西列の南側の同一線上に存在する柱穴1基は、掘立柱建物に付随するものであると思われる。東西の1間は柱間が広く、本来は中間に柱穴1基が存在したと思われるが、調査では見つからなかった。掘立柱建物の時期は奈良時代前半と思われる。

S B202 S B202は調査区の東半部で見つかった一辺5.2m以上、深さ10cmの方形の竪穴住居である。主柱穴については不明である。竪穴住居の床面南壁際で見つかった土坑S K201は一辺1m、深さ25cmの方形の土坑で、一部壁面がオーバーハングして底面が平らになる。底からは手培り型土器や壺など、完形品が数個体出土している。竪穴住居の床面で見つかったS K202は直径70cm、深さ15cmの土坑である。埋土には炭化物が含まれ、土坑周辺の竪穴住居の床面にも炭化物が散在していた。竪穴住居の時期は古墳時代初頭である。

S E201 S E01は調査区の北端で一部を確認したのみで、その殆どが調査区外に延びるため全体形は不明であるが、掘形一辺2.8m程の方形の井戸である。トレンチ北壁断面で井戸枠と思われる板材の一部が確認されている。埋土は黄褐色シルト質極細砂と黒褐色シルト質細砂がブロック状に埋まり、よく締まっている。井戸の時期は、奈良時代後半である。

S K209 S K209は調査区東端で見つかった直径45cmの土坑で、底の平らな韓式系の土器と在地の器台や高杯が出土している。時期は古墳時代初頭である。

S K211 S K211は調査区東端で見つかった直径60cm、深さ20cmの丸底の土坑で、4個体以上の壺が出土している。その出土状況から、壺棺の可能性がある。土坑の時期は古墳時代初頭である。

S K212 S K212は調査区の東南端で見つかった土坑で、一辺2.8m以上の方形と思われる土坑で、その形状から竪穴住居の可能性が考えられる。時期は弥生時代終末である。

S K213 S K213は調査区の北端で見つかった土坑で、直径80cm、深さ1.1mの深い土坑で、土坑の底は平らで、垂直に近く削削されている。埋土は上層が砂質シルトで、下層がシルト層で軟弱であった。遺物は奈良時代の土師器の环が出土している。素掘りの井戸の可能性が考えられる。

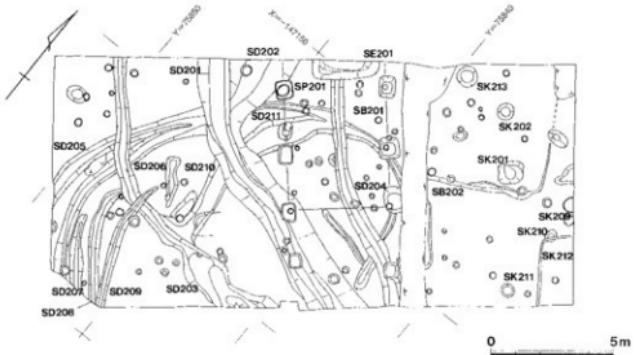


fig. 167
第2遺構面平面図

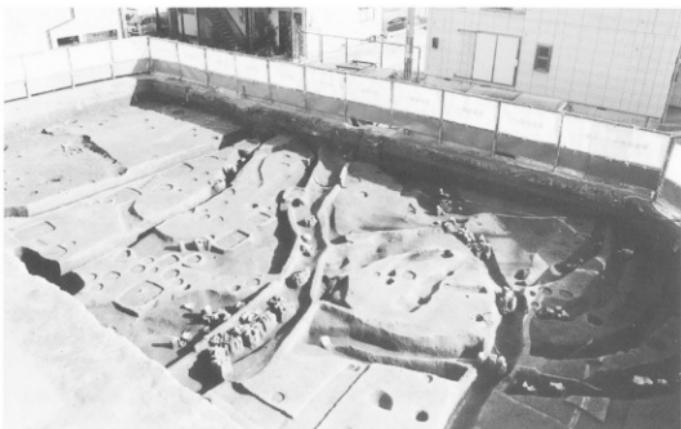


fig. 168
第2遺構面全景

- S D201 S D201は調査区中央辺りを北から南に流れる溝で、溝幅80cm～1.3m、深さ20cm前後である。調査区の北端で土器が集中的に出土している。須恵器の短頸壺、土師器の甕や壺等に加え韓式系の甕や在地系の甕が出土している。その出土状況から、単なる投棄では無く何らかの意味を持った出土状況である。溝の時期は5世紀のものである。
- S D202 S D202も調査区中央辺りを北から南に流れる溝で、その流れる方向はS D201に重なる。溝の規模はS D201より大きく、幅は1.7mで、北端でその規模は3.3mに拡がっている。埋土は上層がシルトで下層は砂疊層であった。遺物の出土は多く、最下層で甕の完形品が単独で出土している。溝の時期は古墳時代初頭である。おそらくS D201はこのS D202の最終埋没期の溝であると思われる。
- S D203 S D203は調査区中央辺りを北から南に流れる溝で、幅50cm、深さ30cmで、南端で幅を拡げ、深さも深くなる。溝の方向はS D201に並行している。溝内からは遺物がまとまって出土している。溝の時期は弥生時代終末である。
- S D204 S D204は調査区中央辺りを北から南に流れる溝で、幅70cm、深さ90cmと深い。この溝もS D201の方向にはほぼ並行している。溝の時期は弥生時代終末である。
- S D205～209 S D205～209は調査区の南西隅で確認された溝で、同一方向に流れる溝である。規模もほぼ均一である。S D205と206はS D201の西側で分岐して2条になった溝で、円弧を描くように延びている。これらの溝の時期は弥生時代後期後半である。
- 第3遺構面 第3遺構面で確認された遺構は土坑8基、溝1基、ピット4基が確認されている。S K301
- S K301 S K301は調査区の西端で見つかった土坑で半分程が調査区外に延びているが、直径2.2m以上、深さ30cm程の楕円形の土坑である。土坑から壺の完形品が出土している。
- S K302 S K302はS K301の東側で見つかった土坑で、第2遺構面のS D202に削られているが、直径1.6m以上、深さ10cmの楕円形の土坑である。埋土には炭化材が含まれ、遺物も比較的多く出土した。
- S D301 S D301は調査区の中央辺りから東に向けて緩やかに下がり、その落ち際で遺物がまと



fig. 169
第3遺構面平面図

まって出土している。遺構名は溝にしたが、溝と言うより浅い湿地状の落ち込みとする方が適切かもしれない。

2. まとめ 今回の調査で確認された竪穴住居は、同時期の竪穴住居の存在が、これまで山手幹線沿いの調査でしか見つかっていなかったが、今回の発見で古墳時代初頭の集落の拡がりがより一層拡大することが明らかとなった。また奈良時代の掘立柱建物の発見により、当時の集落の拡がりが南西から北東方向に拡がることが明らかとなった。

縦横無尽に流れる弥生時代後期から古墳時代にかけて存在した多くの溝は、これまでの調査でも多く見つかっている溝と時期を同じくし、傾斜面に展開されている遺跡の立地から推測して、排水等の機能を持たせたものであろう。現在でも調査中には、雨の後などは雨水が多くしみだして来たことや、「上沢」「下沢」の地名が示すように「沢」であったためかと思われる。

弥生時代前期の遺構は今回の調査でも確認され、当時の集落も大きく拡がりを見せた。ただ、山手幹線沿いの調査で確認されたほど顕著なものは見つかっておらず、その中心は今回の調査地点より南側になると思われる。この弥生時代前期の遺構面は弥生時代中期にあったと思われる洪れ砂で覆い尽くされていると同時に弥生時代中期の遺構は上沢遺跡では確認されていない。その後、弥生時代後期から古墳時代となって、上沢遺跡の人々は洪れ砂の上に再び集落を構成するのである。



fig. 170 調査地遠景

第 29 次 調 査

1. 調査の概要 今回の調査は山手幹線拡幅事業にともなう発掘調査であり、平成8年より調査が開始されている。調査区は10×8mの南北に長いもので、遺構面は2面確認されたが、人為的な遺構は検出されなかった。

第1遺構面 第1遺構面は墨灰色砂質土をベースとする遺構面であったが、上層の擾乱の影響によって、変色していた。

自然流路1 調査地の南側には、自然にできた落ち込み状の遺構が確認された。この落ち込みは深さ1mであり、埋土には上層より砂質シルト、粘土と粗砂の互層、礫まじりの粗砂となっている。遺物はあまり含まれていないものの、濃灰色砂質シルトの層からは、古墳時代前期の高杯・広口壺・小型丸底壺が出土している。

自然流路2 調査地の北側には流路がはしっていた。この流路は幅3m、深さ40cm程で、礫まじりの粗砂を埋土としている。遺物は破片ばかりではあるものの、弥生時代後期の土器が14ℓのコンテナに1箱程出土している。

第2遺構面 砂質土の層の下面には、灰褐色粘質シルトをベースとする面が確認できたが、自然流路が調査区の大部分をしめることもあって遺構は確認できなかった。

断ち割り 遺構面を形成していた灰褐色粘質シルトの中に、土器が少量見られたため、断ち割りをおこなった。しかし遺構は確認されず、また土器もそのシルトの上面だけであった。

2. ま と め 今回の調査は、道路拡幅事業の一環として行った調査であり、上沢遺跡の東端にあたるものであった。そのためか人為的な遺構は確認されていない。しかし更に東から流れ込む自然遺構が存在し、その埋土から、破片がほとんどではあったものの土器が出土したことは、上沢遺跡の広がりを考える上において重要な資料が得られたと思われる。



fig. 171 第1遺構面平面図

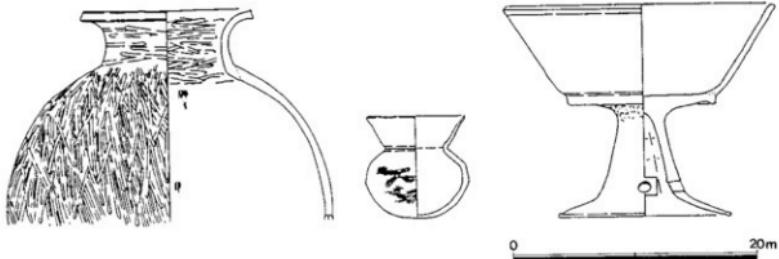


fig. 172 出土遺物実測図 (自然流路1出土)

第30次調査

1. 調査の概要 第30次調査は、基本層序は盛土、旧耕作土、旧床土の下層で第1遺構面となり、第1遺構面のベースとなる灰茶褐色極細砂が第2遺構面の遺物包含層となる。そして第2遺構面のベースとなる茶褐色砂質シルト層が第3遺構面の遺物包含層となる。
- 第1遺構面 第1遺構面で確認された遺構は土坑3基、ピット4基である。
- S K01 S K01は調査区の西端で見つかった土坑で、約半分が調査区外に延びる。遺構は直径80cm、深さ70cmの円形である。遺構の埋土は砂礫層で、拳大の礫が充填していた。出土遺物には石鍋や青磁が出土している。遺構の時期は13世紀である。
- S K02 S K02は調査区の中央辺りで見つかった土坑で、長径1m、短径70cm、深さ10cmの楕円形をしている。
- S K03 S K03はS K02を切る土坑で、長径1.1m、短径1m、深さ10cmの楕円形をしている。この2基の土坑から出土した遺物は細片であるため、時期は不明である。
- 第2遺構面 第2遺構面で確認された遺構は溝1条、ピット1基である。
- S D01 S D01は調査区内を西から東に向けて流れる溝である。西半では溝幅1.5m、深さ40cmであるが、東半部ではその幅を括げ緩やかに落ち込む溝となっている。西半部では埋土は砂礫層が中心であるが、東半部ではシルト質極細砂になる。東半部の落ち際では高杯や甕などの遺物がまとめて出土している。遺構の時期は古墳時代初頭である。
- 第3遺構面 第3遺構面は遺物包含層を掘削したが、遺構面に達するまでに工事影響レベルに達したため、それより下層の調査は行なわなかった。遺物包含層より出土した遺物は弥生時代後期のものである。
2. まとめ 今回の調査はこれまでの上沢遺跡の調査成果を追認するものであった。今回の調査では平安時代の遺構は希薄であったが、第19次調査時には顕著な遺構が目立つ。これらの事実は、上沢遺跡の時期別の集落構造、および遷地の在り方、さらに飛躍すれば自然環境に左右されたであろう土地利用まで、その時代を考察する歴史的事実の多くを我々の前に投げかけていると言えよう。

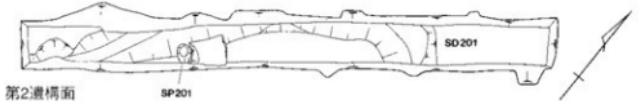
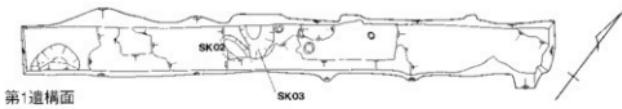


fig. 173
調査区平面図

31. 上沢遺跡 (第21・22・23・25・26・27次調査)

1. はじめに

上沢遺跡内においては、平成8年度より山手幹線の道路拡幅工事に伴う発掘調査が実施されている。これと並行して区画整理事業が進められており、個人住宅等の建設に先立つ比較的小規模な調査が増加する傾向にある。

これらの調査は、工事の影響深度等によって限定されている場合も少なくない。

以下、各調査における概要である。



fig. 174
調査地位置図
1 : 2,500

第 21 次 調 査

1. 調査の概要 今回の調査では、掘立柱建物 4 棟をはじめ、小溝 2 条と土坑を検出した。また、暗灰色砂質シルト遺物包含層からは、内行花文鏡が破片で出土している。
- S B01 東西 2 間 × 南北 1 間以上の掘立柱建物である。柱穴は他の掘立柱建物と比較して大きく、幅約 60~65cm、深さ約 40~50cm を測る。柱間は約 1.6m である。
- S B02 東西 1 間以上 × 南北 3 間の掘立柱建物である。柱穴は径約 40~60cm、深さ約 15~20cm を測る。柱間は約 1.6m である。
- S B03 東西 2 間以上 × 南北 4 間の掘立柱建物である。柱穴は径約 20cm、深さ約 11~55cm を測る。柱間は約 1.8~2.0m である。
- S B04 東西 2 間以上 × 南北 4 間以上の掘立柱建物である。柱穴は径約 20~30cm、深さは主に約 20~30cm を測る。柱間は約 1.8~2.0m である。
2. ま と め 庄内式併行期～鎌倉時代までの遺構を同一遺構面で検出している。遺物は細片であり、各遺構の時期は決定しにくい。時期の確定できるものでは、小溝 (S D01, S D02) は庄内式併行期の遺構である。特に S D02 では壺形土器等が比較的良好に遺存していた。
- 掘立柱建物 S B01 では、平安時代末～鎌倉時代初頭の遺物が出土しており、建物の時期もその頃であろう。また、S B01 と S B03 には切り合い関係が存在し、S B03 がより新しい。S B02～S B04 は建物が重複しているが、方位が揃っており、大きな時期差はないと思われる。おそらく鎌倉時代の掘立柱建物であろう。
- 土坑では SK05 で綠釉陶器片が出土し、平安時代の遺構である。他に SK06 は庄内式併行期の遺構である。
- 遺構面より下層になる暗灰褐色砂質シルト～極細砂には弥生前期の土器が細片で含まれている。あるいは下面において弥生前期の遺構面が存在する可能性も考えられる。



fig. 175 調査区全景



fig. 176 調査区平面図

第 22 次 調 査

1. 調査の概要 今回の調査においては、中世および古墳時代と弥生時代前期の遺構面が確認された。なお、中世と古墳時代の面については識別が困難なため同一面で検出している。

第1遺構面 第1遺構面では土坑が16基、溝が3条、ピット19基が発見された。

土坑 S D01は調査区を北から南に流れる溝で、幅1m、長さ4.8m以上、深さ13cmで、須恵器片、土師器片に混じって瓦片が出土している。時期は中世のものであろう。

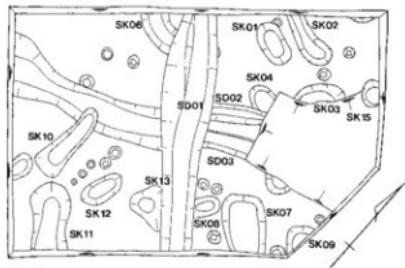
S D02は調査区を東西に流れる溝で、途中から2条に分かれている。2条に分かれる前は幅75cm、深さ25cm。2条に分かれてからはS D02は幅40cm、深さ12cmになり、S D03は幅40cm、深さ10cmになる。この溝からは多くの土器が出土し、まとまって出土した土器もある。S D02・03は出土遺物から判断して、古墳時代初頭のものであると思われる。

第2遺構面 第2遺構面は第1遺構面の下層約60cmで遺構面となるが、約30cmの中間層の下層に弥生時代前期の遺物包含層が存在する。発見された遺構は土坑が3基、溝が3条である。

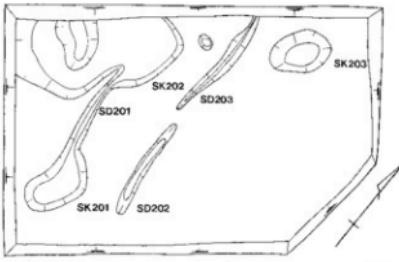
土坑 S K201は長径1.3m、短径80cm、深さ5cmの楕円形の土坑である。S K202は調査区の西北端で一部が見つかったが、長径3.4m以上、深さ15cmの土坑である。S K203は長径1.3m、短径80cm、深さ9cmの楕円形の土坑である。3基の土坑からは弥生前期の遺物が出土している。

溝 S D201はS K201とS K202の間で見つかった溝で、2基の土坑を結ぶように走っている。幅20cm、深さ10cmであった。S D202は幅20cm、深さ10cm。S D203は幅20cm、深さ12cmであった。S D202とS D203は規模が似ていることや、方向が一致していることから、本来は同一の溝であったと思われる。

2. ま と め 今回の調査では第1遺構面で古墳時代・中世の遺構が見つかったが、調査範囲が小規模にもかかわらず、その遺構・遺物の密度は高く、これまでの上沢遺跡の調査成果を追隨するものであった。中心となる遺構の時期は古墳時代初頭のものである。厚い堆積土の下層には弥生時代後半の遺物包含層が存在し、同時期の遺構も確認された。この事もこれまでの調査成果を追隨するものである。



第1遺構面



第2遺構面

0 3m

第 23 次 調 査

1. 調査の概要 今回の調査は、工事影響深度である地表下-110cmまでの調査を実施した。

第1造構面 第1造構面では、ほぼ円形のピットを2基検出した。共に中世の遺物が出土している。

第2造構面 第2造構面では、掘立柱建物が1棟、ピットが3基検出された。

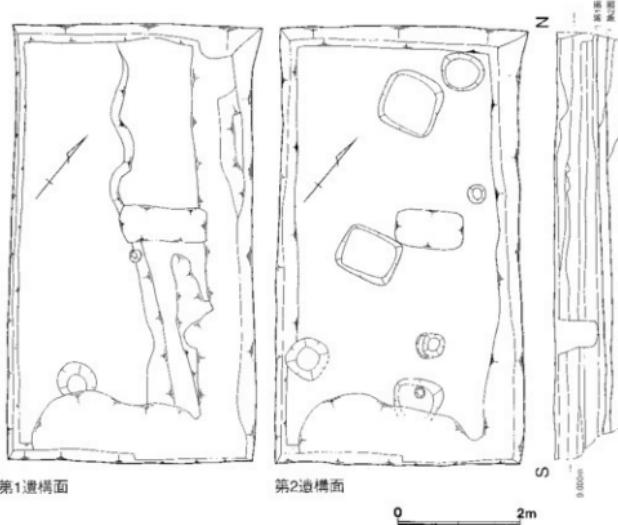
S B01 南北2間(4.5m)以上×東西1間(1.9m)以上の、側柱のみの掘立柱建物である。柱穴は、方形で大型のものと、やや小ぶりのものがある。大型のものは、最長の一辺の長さ98cm、深さ22~27cmを測り、小型のものは一辺約60cm、深さ29cmであり、小型の柱穴が、隅に来る。柱穴埋土出土の土器より、古墳時代後期に位置づけられる。

遺物 今回の調査では、古墳時代及び中世の遺物が28点入りのコンテナで2箱出土した。古墳時代後期および平安時代の、土師器・須恵器等が出土しているが、量的には古墳時代後期(5世紀末~6世紀初頭)の土器が殆どを占める。

2. ま と め 今回の調査地は平成9年度に実施された、第9次調査の調査区の北側に隣接した場所である。第9次調査では、古墳時代後期の大壁造り建物、滑石製品、韓式系土器等の特徴的な造構・遺物が出土している。今回の調査でも古墳時代後期の造構面が存在し、造構も検出されたが、滑石製品、韓式系土器等の遺物は出土しなかった。

上沢遺跡では、これまでにも古墳時代における、渡来系氏族のものと考えられる遺構・遺物が見つかっており、神戸市内における古墳時代の社会構造を考える上で、大きな位置を占める。

小面積ではあったが、今回の調査においても建物跡が検出された。これは集落構成や規模を知るために重要な成果である。



第 25 次 調 査

1. 調査の概要 今回の調査地は、上沢遺跡の北西部にあたり、第1次調査地II区の西方約40mの地点である。標高は約17mで、北から南に向かって緩やかに傾斜している。

第1遺構面 盛土・旧耕土・暗灰色土直下で検出した遺構面である。時期は、中世と思われる。

S D01 S D01は、幅約1m、深さ10~15cmの溝である。北肩は段落ちの埋土である暗灰色砂質土上面から切り込む。須恵器・土師器が出土している。

S D02 S D02は、幅約25cm、深さ約8cmで、断面が浅い皿形の溝である。約1.5m分を検出したが、両側とも搅乱のため不明である。土師器・須恵器が出土している。

第2遺構面 灰褐色粘性砂質土を掘削して、黒褐色砂質土上面で検出した。概して遺構は少ない。ピットを数基検出したが、建物としてのまとまりは確認していない。

ベース層に古墳時代後期の遺物を含むため、時期は古墳時代後期以降と思われる。

第3遺構面 黒褐色砂質土を掘削し、暗褐色粘質土～黒褐色粘質土上面で検出した。古墳時代後期の土師器・須恵器や弥生土器など、遺物が比較的多く出土している。遺構としては、溝、ピット、落ち込みなどを検出した。

S B01 S B01は、方形の堅穴住居で、南北長約3.5m、東西長約1.5m、深さ約20cmを検出した。主柱穴は1ヶ所検出した。直径約20cm、深さ約15cmである。また、コーナー部分で途切れする周壁溝が存在する。古墳時代の土師器の小片が出土している。

S B02 方形堅穴住居の南東部コーナーを検出した。深さは約10cmである。S B01に切られる。古墳時代と思われる土師器が出土している。

2. ま と め 今回の調査では、古墳時代と中世の遺構面を確認することができた。遺構に関しては、調査区の南半では明瞭でなかったものの、北半で古墳時代の堅穴住居や土坑を検出した。堅穴住居は、出土遺物中に須恵器を含まないため、古墳時代前期の可能性がある。

今回の調査地近辺は、第1次調査以来調査が希薄な部分であったが、この度の調査で、集落の広がりを捉えるうえで重要な資料をえることができた。



fig. 179 調査区平面図

第 26 次 調査

1. 調査の概要 検出された遺構は掘立柱建物が2棟、土坑4基、溝13条、ピット数十基である。

S B01 S B01は調査区の南端で見つかった掘立柱建物で、その殆どが調査区の南側に延びるものと思われる。見つかった柱穴は2基のみであるが、その規模から掘立柱建物を構成するものと判断される。柱間2mで、柱穴の規模はS P01・02共に同一で、直径55cm、深さ50cmであった。出土遺物から奈良時代のものと思われる。

S B02 S B02は調査区の南東で見つかった掘立柱建物で、南北1間以上、東西2間以上の建物である。4基の柱穴の規模はほぼ同一で、直径25cm、深さ35~40cmである。柱間は南北が2.2m、東西が1.6mとなる。出土遺物から判断して、6世紀末頃と思われる。

S K01 S K01は一辺が直線状に延びる深さ10cmの土坑である。土坑の底が平らであることや、その形状から堅穴住居の可能性が考えられる。出土遺物から6世紀のものと思われる。

溝 溝は13条見つかったが、どれも残りが悪く深さ10cmまでのものである。溝の幅は30cm内外のものである。S D04・12についてはその掘削痕が残り、溝底に凹凸が残っていた。

2. ま と め 今回の調査では小規模な調査ではあったが、遺構の密度は高く、周辺の調査成果を追随するものであった。

特殊遺物として、滑石製臼玉が遺構面で1点見つかっている。また、製塙土器の碎片も出土している。これらの遺物は今回の調査区の東側で行われた第9次調査でも出土しているものであり、滑石製臼玉については大量に出土している。

また、今回の調査地は、これまで上沢遺跡の西端と考えられている地点であったが、その遺構の密度は周辺の調査成果と変わるものではない。今回の調査地点より西側で行われた試掘調査では遺跡の存在が確認されておらず、このことから、上沢遺跡の西限は自然地形、例えば河道や沼沢地などによって一線を画す如くに終わるものと思われる。



fig. 180 調査区全景

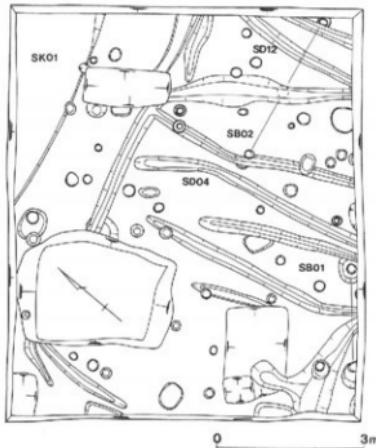


fig. 181 調査区平面図

第 27 次 調 査

1. 調査の概要 今回の調査は個人住宅建設に伴う調査で、計画地は隣接地における調査によって、良好な遺跡が残存することが予測され、敷地範囲の発掘調査を行った。

基本層序は盛土、旧耕作土、旧床土、近代と思われる耕作土となり、明灰褐色砂質シルトの中世包含層となり、第1遺構面となる。調査区の東半分に関しては、約25cm段差があり、第2遺構面と同一レベルになっている。第1遺構面のベース土は茶褐色系シルト質極細砂の遺物包含層で、暗黄褐色砂質シルト層～粗砂層のベースが第2遺構面となる。

第1遺構面 第1遺構面では、掘立柱建物1棟、土坑6基、溝4条、ピット十数基が見つかった。

S B01 S B01は調査区の西側で見つかった縦柱の掘立柱建物で、南北2間以上、東西2間以上で柱穴は6基見つかっている。南北の柱間は2.2m、東西の柱間は2.4mであった。

掘立柱建物を構成する柱穴S P01からは柱穴の上層で完形の須恵器の椀が出土している。下層には拳大の礫を入れていた。同様に、S P02にも礫を入れていた。S P03では柱穴底で平たい礫が散かれていた。掘立柱建物の時期は13世紀のものである。

土坑 S K01～04は直径60～80cmの円形の土坑で、遺物は少量出たのみである。S K05は上層が擾乱されていたが、直径95cm、深さ50cmの円形の土坑である。土坑はほぼ垂直に掘削され、土坑底はほぼ平らである。埋土には20～30cmの礫が入れられていた。

S K06は調査区の北東端で一部が見つかった土坑で、見つかった規模は直径1mほどであるが、全体を推測すれば直径2m以上になるものと思われる。調査区内で判明した深さは80cmであった。S K05同様に埋土には20～30cmの礫が入れられていた。土坑底は逆台形状になる。このS K05・06は調査中も湧水があり、その形状から井戸である可能性が指摘できる。出土遺物から判断して、S B01同様13世紀のものと思われる。

第2遺構面 第2遺構面では、竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟、土坑1基、溝2条、ピット数十基が見つかった。

S B201は調査区の東側で見つかった、長辺4.5m、短辺3.7mの方形の竪穴住居である。竪穴住居の北辺の中央やや東よりに竈を造りつけている。主柱は4本である。竪穴住居の残りは良く無く、その深さは最大で15cmである。竈からは焼土の出土は無かったが、炭化物が出土している。特筆すべきは、2個体以上の韓式土器の甕を、打ち欠いてから甕内に

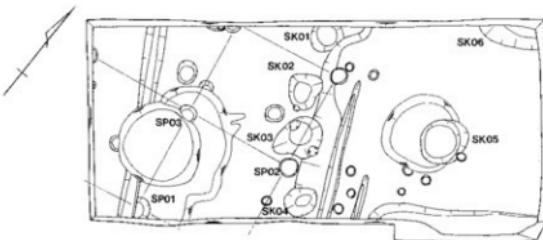


fig. 182
第1遺構面平面図

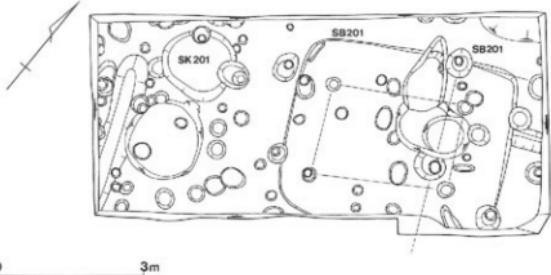


fig. 183
第2遺構面平面図

並べてあったことで、その中には在地製の甕や高杯片も含まれていた。そして並べられた土器の最上部には完形の在地製の高杯が1点置かれていた。堅穴住居の時期は布留期にあたると思われる。

S B202 S B202は調査区の東端で見つかった、南北1間以上、東西1間以上の側柱の掘立柱建物である。見つかった柱穴は3基で、南北の柱間は2.2m、東西の柱間は1.8mである。柱穴の規模は直径60cm、深さ70cmのしっかりしたものである。この3基の柱穴からはいずれも銅を溶かした炉壁片が出土している。同様の炉壁片は今回の調査区の南側隣接地での第4次調査時にも出土している。掘立柱建物の時期は奈良時代と思われる。

S K201 S K201は直径1.5m、深さ20cmの円形の土坑で、埋土から奈良時代の土師器皿や平瓦2個体が出土した。この平瓦は厚みが約3cmある立派なものである。

2. ま と め 調査地は、調査面積は小さいものの、遺物・遺構の密度は極めて高く、上沢遺跡の中心的位置に当たると思われる。調査結果はこれまでに調査された成果を追隨するものであるが、第2遺構面で見つかったS B201の韓式土器は、その出土状況や遺物そのものからも特筆すべきものであろう。またS B202の柱穴から出土した銅の炉壁は近辺に銅製品の工房の存在を示唆するものである。またSK201から出土した瓦も、周辺に瓦葺きの建物の存在が考えられ、南接する第4次調査時に出土している銅製帶金具とも併せて、官営の施設の存在が想起される。



fig. 184 第2遺構面全景

ゆの やま
32. 湯山遺跡 第3・4次調査

1. はじめに

有馬温泉はかつて湯山とよばれ、飛鳥時代に舒明天皇・孝德天皇が訪れていることが記録に残るなど古い歴史をもつ。しかし、考古学的にはほとんど未開拓で、初めて発掘調査の行われたのが平成8年度、今回が3回目の調査となる。

fig. 185
調査地位図
1 : 2,500



2. 調査の概要

第1次調査で湯山御殿の庭園・湯屋が確認された地点の背後にある石垣および墓地となっている部分についてその利用計画があがった。遺構の状況を確認するため、この部分についてトレンチ3本を設定し、調査を行った。その結果、石垣上面が曲輪であることが確認され、曲輪面上の状況等を把握するため、さらに第4トレンチを設定し調査を行った。

石垣

S W07は、高さ約2mの近年積み直した石垣である。断ち割り調査を行ったところ、その背後のテラス面は桃山時代に盛土によって造成されたものであること、上段の石垣S W08はこのテラス上に積まれていることが確認された。断ち割りを行った範囲では地山は確認できず、すべて盛土による造成である。また、S W07の裏込め部分も積み直し以前の築造当初のまま残っている部分があり、近年積み直しを行っているものの、ほぼ同じ位置に石垣があったことを確認できた。

曲輪

石垣S W07・S W08はテラスをもつ一体の石垣であることが確認されたが、湯山御殿の庭園・湯屋のある面と、この石垣上にある曲輪面の比高は約7mがある。

石垣S W08は現状で北隅から約65

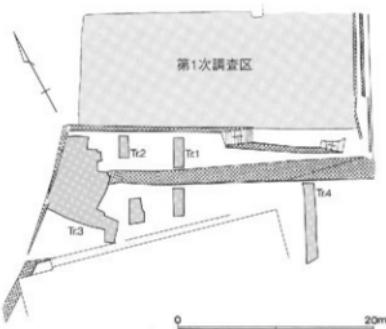


fig. 186 調査区設定図

mを確認できるが、曲輪の奥行きは最狭部分で約5m、最大約15m、平均10m程度であって、曲輪の平坦面がかなり狭長なものとなっている。ここに建物の存在を考えた場合、あまり大きなものは想定しにくい。

この曲輪の背後には現在、湯泉神社が所在する比較的広い平坦面が存在し、この平坦面がいつ造成されたのか、湯山御殿と関わりがあるのかといった点が注目される。

SW09 SW09はテラス上にあるSW08とひと続きの石垣で、下位の2~3段分の石積みが残っている。北隅の角石が根石および地上に見える最下段の2段分確認されているが、この石は前面側に傾いており、石垣SW09は自重で崩れたものと考えられる。

SW14 SW09の崩壊後、曲輪面に上がるためと考えられる石段SW14が積まれる。しかしこれも下部が崩れて落ちており、調査開始時には地中に埋まっていた。

隅 檻 SW08・SW09によって囲われる曲輪の北隅部分で確認された石垣で、SW08に並行してのびるが、面はその反対、すなわち曲輪の内側に向く。したがってこの両石垣に挟まれる部分は建物あるいは塀等の基礎であると推察される。両石垣の上端間の間隔は約4mである。

ここに予想される建物は隅櫓あるいは曲輪の周囲に巡る多聞櫓であるが、トレント4で確認された石垣積み基礎の幅と異なる点から、この地点に建つ構造物は曲輪隅に建てられた隅櫓である可能性が高い。

SW18 第4トレントで確認された石垣でSW08と表裏関係になり、曲輪面の周囲を囲う石壘状の遺構の曲輪面側の石垣である。ここで確認された曲輪面の高さは、標高401.8mでトレント3で確認された曲輪面の高さとほぼ等しい。遺存する石垣の高さは本来の曲輪面上約90cmである。SW13・SW08間の上面幅が約4mであるのに対し、SW18・SW08間の幅は約3mである。トレント4で確認された石垣積みの基礎は、曲輪の周囲に巡らされた多聞櫓の基礎と考えられる。

3. まとめ 調査の結果、極楽寺南側の石垣および上段の平坦面についても湯山御殿の一部であることが確認され、現状保存することになった。石垣については安土桃山時代の特徴を良く示すものとする評価が与えられ、崩壊部分を積み直すなどを整備し、資料館庭園の背景に生かすこととなった。

なお、第1~4次調査の概要については2000年に『ゆの山御殿』が刊行されている。



fig. 187 帯曲輪



fig. 188 隅櫓 SW13

33. 長田神社境内遺跡 第12次調査

1. はじめに

長田神社境内遺跡は、延喜式内社である長田神社の周辺、苅藻川と新湊川が合流する地点から北方に亘る遺跡である。大正13年に発見されて以来これまでに、11次にわたる調査が行われており、縄文時代晚期から近世にかけての集落遺跡であることが確認されている。中でも、弥生時代後期から古墳時代の堅穴住居などの遺構が多く検出されており、周辺地域における拠点的集落であると考えられている。また、平成9年度に行われた第10次調査では、弥生時代後期～終末期のものと考えられる、小型彷彿鏡が出土している。

今回の調査は、店舗付共同住宅の建設に伴うもので工事影響深度である地表下1.0mまで調査を実施した。



fig. 189
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

調査区の基本層序は、地表より盛土および耕作土の下に中世の耕作土である灰色細砂と弥生時代の遺物包含層である黒褐色粘土質シルトをへて弥生時代後期の遺構面である淡褐色細砂となる。今回の調査では、弥生時代後期の堅穴住居が2棟確認された。

S B01

隅丸方形の竪穴住居であり、主軸は真北から45°振って建てられている。調査区の北角で検出されたため、詳細な規模は不明であるが、プランは4.5m以上×3.5m以上、残存する深さは約50cmを測る。主柱穴は2基確認されており、4本ないし6本柱であったと考えられる。柱穴の直径は30~40cm、深さは40cmである。住居址の中央からは、プランが75cm×65cmのほぼ長方形を呈する、深さ約26cmの土坑が検出されている。住居址の埋土からは弥生土器が多数出土しており、土器の時期からこの住居址は弥生時代後期のものと考えられる。

S B02

隅丸方形の竪穴住居であるが、その殆どが中世以降の洪水によって失われていた。一辺が2m以上、残存する深さは35cmである。柱穴が1基のみ検出されており、直径30cm、深さ28cmを測る。出土器より、弥生時代後期のものと考えられる。

3. まとめ 今回の調査地は第10次調査の調査区の南側に隣接した場所である。第10次調査では、弥生時代後期～終末期の遺構・遺物が多く出土している。今回の調査でも弥生時代後期の遺構面が存在し、竪穴住居2棟を検出するなど、当時の集落の一端を窺い知る資料を得ることができた。また、今回の調査範囲の西南半分は中近世以降の河道によって失われていることがわかり、今後埋蔵文化財調査を行うに際しても有効な成果となった。



fig. 190 SB01

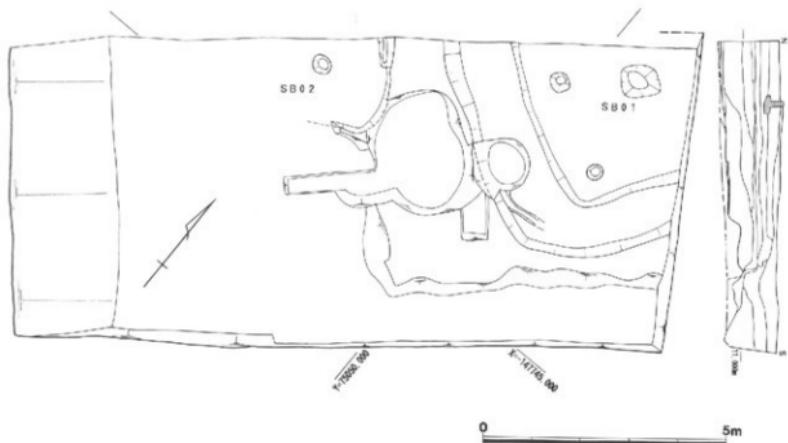


fig. 191 調査区平面図・断面図

ながたみなみ 34. 長田南遺跡 第1次調査

1. はじめに

長田南遺跡は長田区の中央部を流れる新湊川の東岸の沖積地に位置しており、縄文時代～中世の複合遺跡である。

今回の調査は共同住宅建設工事に伴うもので、先年度より実施しており、弥生時代中期中葉～庄内併行期の遺構、縄文時代晚期～中世の遺物が確認された。



fig. 192
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

基本層序

上層より現代盛土、旧耕土、中世耕土層、遺物包含層の順で、遺物包含層の上面が第1遺構面、下層上面が第2遺構面 (G.L.-100~120cm程度) となる。さらに第2遺構面ベース層の洪水砂状堆積土の下層上面が第3遺構面（第2遺構面より20cm程度下層）となっている。その下層はシルト、粗砂、極細砂が互層となり、遺構は確認できなかったものの、縄文時代晚期の遺物を含む流路状の堆積層が確認された。

第1遺構面

中世の遺構面にあたるが、遺構の密度は希薄で、2区の東端において掘立柱建物 (S B 04) の一部が検出された程度である。



fig. 193 S B04

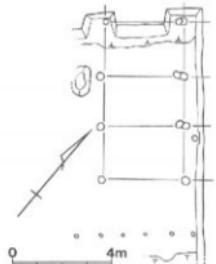


fig. 194 第1遺構面 S B04平面図

第2遺構面

弥生時代中期後半～庄内期の竪穴住居、溝、土坑、落ち込み等の遺構が検出された。

竪穴住居は2棟(SB01・02)重なるようなかたちで検出されており、いずれもやや不整な円形を呈し、規模は直径約7mである。この2棟の竪穴住居は時期差が若干みられるものの、弥生時代後期後半～庄内併行期に属すると考えられる。その他、溝(SD01)、土坑(SK01～05)、落ち込み(SX01～03)などがあるが、SX03が弥生時代中期後半に比定される他は、弥生時代後期後半～庄内併行期の範疇に含まれると考えられる。



fig. 195

第2遺構面
西部全景

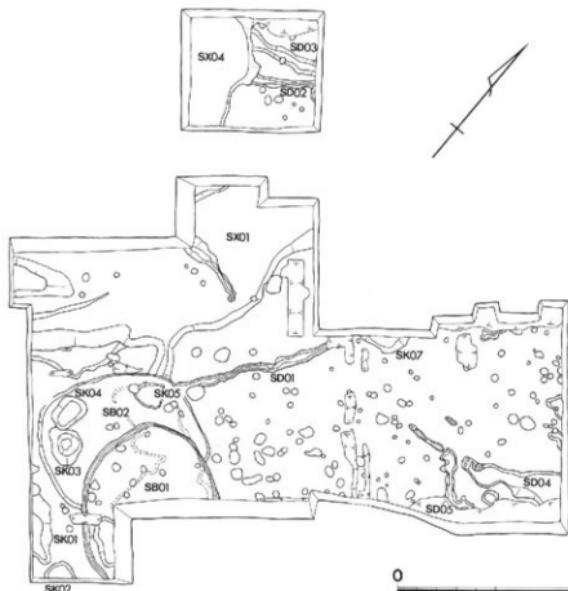


fig. 196

第2遺構面平面図

第3遺構面 弥生時代中期中葉頃の遺構面と考えられ、竪穴住居、ピット、流路等が検出された。

竪穴住居は1棟（SB03）で、第1遺構面のものに比べるとやや大ぶりで、径約9mの円形のものである。出土遺物が小細片のため、時期の特定は難しいが、弥生時代中期前半～中葉に属すると考えられる。流路はSB03を切るように北東～南西方に流れしており、埋土から弥生時代中期中葉の遺物が出土している。



fig. 197
第3遺構面
東部全景

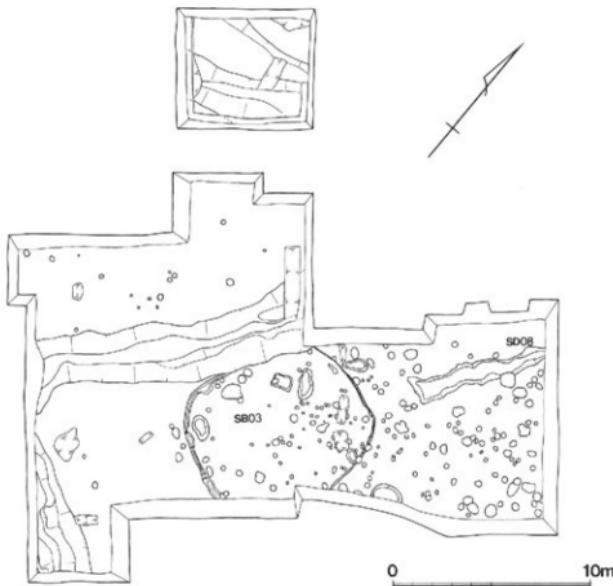


fig. 198
第3遺構面平面図



fig. 199
S B01・02

第4遺構面 生活面としての遺構面は存在しない。縄文時代晚期～弥生時代前期の遺物を含む流路状の堆積層が確認されたのみである。

出土遺物 土器類、石器類があるが、大半は土器類で、その多くは弥生時代後期後半～庄内併行期に属し、包含層出土のものが量的には多い。

遺構内からの遺物は、S B01・02で比較的まとまって出土している。器種としては、弥生時代後期後半～庄内併行期に属すると考えられる壺・壺が多い。

石器類は器種の判明するものではサヌカイト製の石鏃が数点で、それ以外は剝片である。

3. まとめ 今回の調査では、今まであまり知られていなかった長田南遺跡の実態をかなり明確にすることができた。

弥生時代後期後半～庄内併行期の遺構面（第2遺構面）は、北側に隣接する長田神社境内遺跡で確認されている同時期の集落に連続するものと考えられ、この集落が南側に拡がることが判明した。

成果の中で特筆すべきことは、弥生時代中期中葉頃の遺構面（第3遺構面）が確認されたことである。過去の近隣における調査で、弥生時代後期以前の遺構面が確認されたのが1度のみで、今回の発見はこの地域の歴史を知る上で重要である。さらに、遺構面を覆う包含層や遺構から弥生時代前期前葉～中葉の土器片も数点出土しており、神戸市域では数少ない出土例である。

同地域は、長田区内でも遺跡の密集する地域で、今後とも多種多様な成果が得られる可能性が高い。

今後の調査において、同地域における原始・古代の様相が、徐々に明らかになっていくように思われる。